
夜明けの魔術師

toto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの魔術師

【Nコード】

N91530

【作者名】

tototo

【あらすじ】

はじまりは一通の手紙だった。

幼馴染の魔術師アキサリスに便乗して、一緒に王都を目指す村娘リン。けれどその道のりはどうも厳しい。

RPG的なノリのファンタジーになります。

手紙

春風が運んでくる、ここちよい花のかおり。

あつたかなおひさまとぽかぽか陽気。

ことりたちのさえずり、草木をゆらす風のおと。

平和だなあ。平和すぎて、あくびがでちゃう。

つい、うとうとってしそうになる体をひきしめて、わたしはうつそうと茂る緑の中へ足を踏み入れる。

おおきな森だった。

じっさいにどれくらいおおきいかは、じつはよく分かってない。でも、とてつもなく広いつてことは実感できていた。だって、歩いても歩いてみずーつと緑が途切れないのだ。

すこく昔に、中央の国からおおきな軍隊がやってきて、この森の広さを調べたことがあったらしいけど。一昼夜あけたあとに全員、森の入り口に戻ってきたらしい。誰も、森の向こう側をみないまま、ずっと北にむかってまっすぐ進んでいたはずなのに、もとの場所に帰ってきてしまうなんておかしい話だってみんな首を傾げた。そのときのえらい学者さんはいった。うつそうとした森に惑わされて、方向感覚が狂ってしまったんだろうって。

でも、不思議と、この森の向こう側をみたひとがいた話はだれも聞かない。

いつからか、この森には終わりが無い、はてがないってささやかれるようになった。

だから、ここは、はてなしの森って呼ばれている。

べつに害があったりするわけじゃないし、むしろめぐみのほうが多いけど、立ち入るひとは少なかった。やっぱり、気味悪いんだろ
うな。

「アキちゃん。アキちゃん、どこー？」

そんなところに、好き好んで毎日のように足をはこぶひとがいる。
わたしの幼馴染のアキサリス。アキちゃんだ。

森に行くとい、アキちゃんはお昼時になっても戻ってこない。だから、アキちゃんのお母さんに頼まれてわたしが迎えにいのはめになる。

別に森に入ることに対して抵抗はないし、むしろ、ちょっとおちつくし好きな雰囲気だなあと思うけど、アキちゃんを探しにいくとわたしのお昼ごはんの時間が遅れる。そのことが不満だった。いちどアキちゃんにそう訴えると、鼻で笑われた。かわいくない。
「アキちゃん、ごはんだよー。おなかすいたよー。飢え死にしちゃうよー」

ぐうって空腹を訴えるおなかをさすって慰めながら、けなげにアキちゃんを探す。そうしていると、どこからかがさがさって音がしてアキちゃんが現れた。もつと早く出てきてくれればいいのに。
「せっかく出てきてやったのに。なんだよ、ぶっさいくな顔しやがって」

相変わらず、愛想のない態度だ。ただでさえ目つきが悪くて怖い顔なのに、薄氷のような目に剣呑な光が宿るとさらに凶悪になる。それでも、ぼさぼさの枯れ草色の髪をもうちよつと整えてくれたら、チンプラみたいな見た目も少しはマシになると思っただけだな。

「ぶさいくっていった！ひどい！」

「腹すいたくらいでぶーたれてるおまえが悪い」

ぶくーって膨らませていたわたしの両頬を、アキちゃんは容赦なく手のひらでつぶした。痛い。おっきい手に挟まれたまま、くいつと上を向かせられるとアキちゃんの鋭い目がすぐ近くにあった。

「おなかすいた！」

「うるせー。耳元でキンキンわめくなよ。おら、帰るぞ」

アキちゃんは口の中でちいさく言葉をつぶやいた。そのまま、おでことおでこをくつつけて、そこからわたしがぜんぶ、アキちゃんとおなじものになってしまったような奇妙な一体感。浮遊感。

その一瞬後、わたしたちはアキちゃんの家裏手にある草原に降り立っていた。

これ、魔法っていうらしい。こんな風に、一瞬で場所を移動することができるなんて、つくづく便利だ。

わたしも使ってみたけれど、残念ながら、まったく才能がなかった。アキちゃんはお父さんが魔法使いで、才能もあるし環境もいい。凡人のわたしにとっては、なんだかうらやましい話だった。

「こんな手段もってるんだから、ぱぱっと時間どおりに帰ってきてよ。そしたらおばさんだってわざわざわたしを迎えにやろうなんて思わないよ。わたしはおなかすかないし、アキちゃんも邪魔がはいらないし、みんなしあわせだよ！」

「……。あそこにいると時間が分からなくなるんだよ」

「ふーん。そっかー。アキちゃんにも私の正確な腹時計を分けてあげたいなあ。便利だよ」

「いらねー」

アキちゃんはわたしをおしのけると、さっさと家に向かって歩き出した。

昔はもうちょっとかわいかったのになあ。いつからかすっかり無愛想な男の子になっちゃって、わたしは寂しい。

ゆううつになりかけていたわたしの鼻腔に、なんともいえない芳しい香りがすべりこんできた。ごはんだ。アキちゃんの家のごはんは、とびつきりおいしい。アキちゃんを迎えにいったあとは、ここでおひるをご馳走になるのがわたしの幸せな日課だった。

「おばさん！今日のおひるはなーに？」

アキちゃんのうしろを追いかけて、家に飛び込めば、白いエプロンをつけたアキちゃんのお母さんができたてのスープをテーブルに並べているところだった。

アキちゃんのお母さんとはとてもかわいい。

今日はアキちゃんと同じ枯れ草色の髪を後ろで束ねて、水色のワンピースの上から紺色のガウンを羽織るという上品な村娘風の格好

をしていた。こぼれおちそうなくらいおおきな藍色の瞳を細めて、微笑まれると、胸がきゅんっとしてしまう。

「いつもお迎えありがとうね、リンちゃん。助かるわ。今日はね、なんと！鶏肉とおやさいたっぷりのポトフと焼きたてのふんわりパンよ」

「わーい！いったきまーす！」

アキちゃんの隣に遠慮なく座って、ポトフとパンをほおばる。おいしい！

「生きててよかったあーって思える瞬間だー」

「おまえはお手軽でいいな」

このときばかりは、アキちゃんの嫌味なんてぜんぜん気にならないう。やっぱり、おいしいごはんってすごく偉大だ。

「はい。リンちゃん、牛乳も飲んでね。アキもちゃんと飲むのよ」「そうだよー。じゃないと、背、おつきくならないんだよ」

気を悪くしたように、アキちゃんはぷいっつと横をむいてしまった。背がちよっと低いことがアキちゃんの悩みの種らしい。乱暴でえらそうな態度のくせに、悩みが小さいなあ。

アキちゃんのこういう弱みをいじるのも、わたしの楽しい日課だった。アキちゃんよりチビなわたしがいつてもたいして堪えないだろうけど。

「……誰かくるな」

「んえ？」

アキちゃんは食事を中断して、玄関にむかった。玄関といっても、小さな家なので、食事をする居間と外は直接つながっている。

だから、ひょいっつと身体を傾ければすぐに外の様子は伺えた。

アキちゃんは訪問者と二、三言かわすとすぐに扉を閉じた。その手には上等そうな白い封筒に、仰々しい赤い蠟印がしてある。このあたりではまず使わなさそうなものだ。

「手紙屋さん？めずらしーね」

「ああ。おやじ宛で、急ぎの用件らしい。おふくろ、おやじどこに

いるんだっけ」

お婆さんは家の外をまっすぐに指差した。

「外の書斎に引きこもってるわよ。届けてあげて」

「わかった」

そう応えて、アキちゃんは出て行った。

なんだか、家の中の空気が重い。気のせいだろうか。

こころなしか、お婆さんは怒っているようだった。じつとわたしが見つめていると、いつもどおりの笑顔を浮かべてくれたけど、なんだか不安だ。

「わたし、帰ったほうがいい？」

「ううん。いてくれたほうが、いいかもしれないわね」

お婆さんのその言葉は、いつそうわたしを不安にさせた。

なにか悪い報せなんだろうか。

お婆さんは、なにか心当たりでもあるのだろうか。

アキちゃんが、アキちゃんのおとうさんを連れて戻ってくるまでわたしは気が気じゃなかった。

あ。もちろん、ポトフは残さず食べたけど。

楽園への招待

「王都ってとおいんだねえ」

「馬車でいけば、四〇五日ってところだな。村から乗合馬車の駅まで丸一日かかる」

「そっかあ。なんだか旅行みたいでわくわくするねえ」

「……。おまえは気楽でうらやましいよ」

アキちゃんのお父さんの元に送られた手紙は、なんと、王都に住むえらいひとからの招待の手紙だったらしい。おじさんって、無口で静かだから、なにをやってるのか、なにを考えてるのかよく分からないなぞのひとだったんだけど、王都ではとっても有名な人なんだって。

偏屈者でも有名だから、実力があってもこんな風に召集されることは滅多にないんだっておばさんが言っていた。つまり、それだけ切迫したなにかがとおい王都では起こってるんだろう。

けど、詳細なことはなにも書いてなかったらしい。

おじさんは手紙に一度目を通してから、静かに言った。

「アキサリス、ぼくの代わりに行ってくれるね」

頼みごとでも、ましてやお願いでもない。おじさんの中の決定事項だ。アキちゃんはいやあーな顔をしたけど、しぶしぶといった感じで了承した。

おばさんはなにも言わなかった。黙って、アキちゃんの荷造りの世話を焼いていた。

旅装束に身を包んだアキちゃんは、さながら、夜盗のようだった。暗がりであつたら、ぜったい悲鳴をあげてしまう感じた。黒で統一された長袖と下ばき、羊の皮で作られたブーツにそろいの手袋。土色の麻布のマントを頭からすっぽりとかぶる形で身体にまきつけている。うん、近づきたくない。目、怖いし。

簡素な服装の中で、目をひくのは赤い首飾りだった。こどものこ

るにも首からさげているのをみたことがあるけど、ずっとつけていたのかな。赤くて丸い宝石を銀の鎖で通したシンプルな首飾り。お守りみたいなものなのかもしれない。

一方、わたしといえば。

紺色のフード付きの膝元まであるローブを着て、さらに上から同じ色のマントをまとっている。動きやすいように作業用のズボンをはいて、金属ちつくなあまり綺麗な色じゃない髪の毛は、うしろで束ねるだけにした。いちおう、旅だから、あまりかわいい格好はしていない。

「ところでさ、おまえ、疑問におもわねーの？」

「なにを？」

「王都に呼ばれたのはおやじ。でも、おやじは今、手が離せない用事があるから代理で俺が王都に向かうことになった。ここまではいいな」

「うん」

「で、なんでおまえもついてくることになったのかってことだ」

そう。アキちゃんの王都への旅路に、なんと、わたしも同行することになったのだ。

「おばさんが、アキちゃんをひとりで王都に向かわせるのは不安だからだつて言つてたよ！いわば、わたしは、アキちゃんの保護者になるのです」

「それでおまえは納得できるのか……そうか……」

アキちゃんは、複雑そうな顔でわたしをみつめた。言葉を飲み込んだつもりだろうけど、アキちゃんの目は雄弁に語ってくる。裏があるに決まってるだろうが、なんでもっと考えようとしななんだ、と。

わたしだつて、疑問に思わなかったわけではない。でも、わたしはアキちゃんのお母さんとお父さんを信用している。

両親のいないわたしを、娘のようにかわいがってくれたひとたちだ。そんなひとたちを疑うなんてできなかった。それに、アキちゃ

んをひとりで王都に送り出すのはやっぱり、わたし自身も心配だったのだ。……なんていうと、ぜったいアキちゃんをあきれるだろうけど。

「なによ。その、可愛いそーな子を見るような目は」

「いや、俺がすっかりしなないといけなないと、改めて再認識していただけだ。……はあ」

「ため息！わたし、アキちゃんと王都まで旅行できるの楽しみにしてるのに」

「そんな気軽じゃねえんだよ。こっちは。せいぜいおとなしくして、足をひっぱるような真似はしてくるなよ」

そう言われて、わたしはもちろん！とない胸をはって言った。

だって、村をおりて、山ろくの乗合馬車の駅までいったら、あとはずーっと馬車旅なのだ。

なにも考える必要はない。がたがた揺られているだけで、自動的に王都につくのだから。

だというのに。

わたしは、さっそく足をひっぱっていた。

「くらいよー。さむいよー。アキちゃん、どこー？」

日はすっかりおちて、あたりは冷え込んでいた。これが大地の上ならまだよかったのだけど、石畳はひんやりとした冷気を反射するだけでわたしをあつたかく包んではくれない。石造りの箱の中で、ゆいいつ外へと続く扉は鉄格子に覆われて、引いても押してもびくともしない。

閉じ込められたのだ。

ふもとの村を目指して、早朝、ふたりで故郷の村を離れて山をおりはじめたところまではよかった。

太陽が真上にほどなく到達するころあいになって、わたしの腹の虫がないた。こらえ性のないわたしはアキちゃんにごはんをねだった。渡されたのは乾パンだった。当然、わたしは抗議した。そこからは喧嘩だ。旅立ってわずか数時間、わたしたちは喧嘩別れした。

ふもとの村に続く道は、ふたとおりあった。獣道と正規の道。悠々自適に整備された道をおりるアキちゃんに、あっかんべーと舌をだして、わたしは獣道を駆け下りた。

おもえば、それが間違いだったのだ。

気がつくと迷っていた。あるようでない、ないようである道を素人が渡るなんて無理があつたのだ。思わず、アキちゃんの名前を呼びそうになったけど、我慢した。

とりあえず、下へ下へと降りていけば、ふもとにたどり着くだろう。不安を押し込めてそう結論付けると、わたしはとにかく足を動かした。

「うえ？」

なんの脈絡もなく、首筋に衝撃がはしった。そして、暗転。今に至る。

ほんと、ここ、どこだろう。村の近くの山の様子はある程度把握しているつもりだったけど、こんな石造りの人工物があるなんてしなかった。

冷え冷えとした空気に、ぶるりと身が震える。マントを前でかき合わせて、鉄格子に近づいてみる。

「すみませーん。だれかいませんかー？」

返事はない。しんとした暗闇がただ広がっていた。

いま、何時くらいかなあ。わたしの腹時計は、ぺこぺこすぎて機能していない。

アキちゃん、もうとつくにふもとの村についたかな。ひとりで、王都に向かう馬車に乗ってしまったのかな。もう会えないのかなあ。ひとりで閉じ込められていると、いやなほうへいやなほうへ思考がむく。

とりあえず、いまはなんとかしてここから脱出しないと。じつとしていても、事態がいい方向にむくとは思えなかった。

「でも、どうしよう」

わたしは、アキちゃんみたいに魔法が使えない。それに、とくべ

つ力があるというわけでもない。もし、魔法が使えたら一瞬でこんなところから抜け出せるし、力があれば鉄格子をやぶって逃げることもできる。

結局、こうして手をこまねくことしかできないのだと、痛感させられた。

才能ないからっていつて、おじさんの魔法のほどきから逃げなかったらよかったな。力がないからっていつて、おばさんの護身術の教えを断らなければよかったな。アキちゃんと、あんなことで喧嘩なんてしなきゃよかったな。

なんだか、どうしようもない後悔ばかりが押し寄せてきた。

そのとき、ゆらりと空気が揺れた。煌々とした赤い光に闇が退けられる。同時に、かつん、かつんと闇を割るように、静かな足音が聞こえてきた。

凶暴な光に姿を暴かれて、わたしは目をつむった。がちやがちやと鉄格子の鍵をあける音がする。誰だろう。怖い。身をすくめて、わたしはしゃがみこんだ。

触れたのは、おおきな男の人の手だった。無遠慮な手つきでわたしの腕をとると、無理やり立たせる。足にうまく力がはいらなかった。ちらつと男の人の顔をうかがおうとしたけれど、男の人は顔中に包帯をまいていて、見えるのはどろりとした不気味な目だけだった。

「歩け」

少ししゃがれた声。誰なんだろう。誰なんだろう。ぜんぜん知らないひとだ。

男の人に導かれるまま、わたしは歩いた。細い石造りの通路だった。けっこうな距離を歩いたように思う。それとも、恐怖のあまり感覚がおかしくなっていたのかもしれない。

やがて、わたしの目の前に木で作られた扉が立ちはだかった。

うしろを振り返ると、男の人が顎で入れと促した。

扉のとつてに手をかける。なんとなく、あけたくないなと思った。

開けたら、もう二度と光を拝むことができなくなる気がした。

ぐずぐずとするわたしに業を煮やしてか、いきなり男の人がそばにあった金属製のバケツをおもいきり蹴った。乱暴な音に心臓が縮んで、男の人から逃げるように、わたしは扉を開けて中に滑り込んだ。

目の前に広がる光景が、信じられなかった。

無数のランタンが壁にかけられていた。部屋の広さはアキちゃんの家の間くらいで、そんなに広くはない。石造りの腰掛が全部で三つおいてあった。その腰掛のうちのふたつに、ふたりの少女が並んで座っている。

どちらもみたことのない少女だった。年のころは、わたしと同じくらい。本来は、いきいきとした瑞々しい輝きを放っているであろう肌も、瞳も、なにもかもすべてが濁っていた。

彼女たちの足元からまるく円を描くように広がる染みの色。まるで絵の具をぶちまけたような無造作さ。ランタンのあたたかい光に照らされて、異様な光景が広がっていた。

「なに、ここ」

ずっしりと胃のあたりが重くなって、ほとんどなにも食べてないのに吐きそうになった。うしろで、かちやりと音がした。わたしをここまで連れてきた男の人が、扉に鍵をかけたのだろう。

へたりこむわたしを、男の人が無理やり立たせる。そして、最後のパンツをはめるように、わたしを石造りの腰掛の上に座らせた。

「いい夜だ」

頷けるわけがない。

「これで、世界は変わる。偽物は消えて、本物が残る。果たしてどちらが真実なのか、君に見せられないのが残念だ」

流暢にしゃべって、男の人は、真新しいナイフでわたしの頬をすうつとなでた。ぴりりと肌を裂く音がしたのに、痛みはなかった。全身が麻痺したかのように、動けない。

わたし、殺されちゃうんだ。

じわりと恐怖がめじりから零れ落ちる。男の人は、まるで恋人を
いつくしむかのように、優しい手つきでそれをぬぐってくれた。加
虐者と被虐者の奇妙なバランスは、まるでこの男の人に愛されてい
るのではないかという錯覚をわたしに与える。そんなのまやかしの
に。

「ばいばい」

ぎらりと、ナイフが凶暴な光を宿した。

目を瞑ることも、身体をよじって逃げ出すこともできずに、わた
しはただその切っ先をばかみたいに見つめていた。

風が吹いた。

どこにも、風が吹き込むような場所があるとは思えない小部屋の
中で、とつぜん、風が巻き起こった。

次の瞬間、ふわりと土色のマントが私の目の前に広がった。

信じられない。アキちゃんだった。

アキちゃんは俊敏な動きで男の人のナイフを蹴り落とすと、わた
しを荷物みたいに抱えて後ろに下がった。小さな部屋だから、あま
り距離がとれるとは思えない。

男の人は動揺したようだったが、すぐに気を持ち直したようだっ
た。腰からもう一本ナイフを引き抜くと、真正面から対峙する。

「魔術師か。なぜ邪魔をする。もうすぐ、世界の真理がおとずれる
というのに」

なめまわすように、男の人はアキちゃんを見据えた。そして、彼
のどろりとした感情のない瞳に、はじめて、喜色が浮かんた。

「その石は……はは、そうか。真実はそこにあつたのか」

アキちゃんは顔をしかめてつぶやいた。地面におろしたわたしの
手を握る手はわずかに震えていた。

「なにいつてんだ、このおっさん」

「し、しらない」

アキちゃんの手をぎゅっと握り返して、わたしは泣きそうになり
ながら答えた。だって、本当にわからないのだ。この男の人はいつ

たいなんなんだろう。急に流暢に話し出したり、簡単に殺そうしたり、喜んだり、わけがわからない。

ただひとつ分かるのは。きっと、わたし、この男の人とは一生分
かり合えないってことだけだ。

男の人は、ゆっくりとわたしたちににじりよってくる。アキちゃん
とわたしがいるのは、この部屋の唯一の出入り口とは反対側だっ
た。逃げ場所はない。どうしよう。アキちゃんの魔法で脱出はでき
ないのかな。

ちらつとアキちゃんを見上げると、アキちゃんは首を振った。あ
まり、頻繁に使えるような魔法ではないらしい。すぐうしろには、
無慈悲な石壁があった。絶望的だった。

「若い魔術師よ、おまえは必ずたどり着く。偽りと嘘に塗り固めら
れた偽物の樂園は」

男の人は、わたしとアキちゃんの目の前で立ち止まり、鋭いナイ
フを天高く振り上げる。

「おまえを殺すだろう」

まるで、呪いの言葉だった。

アキちゃんは、わたしを守るように抱きしめてくれた。ぎゅっと
目を瞑ってくるべきときを待つ。

ごめんね、アキちゃん。わたしが間抜けなばかりに。でも、来
てくれてうれしかった。わたしばかり嬉しくてごめんね。ふたり一
緒なら、死ぬのは怖くないかなあ。アキちゃんにはいい迷惑だった
よね。ごめんね。ごめんね。最後に、おばさんの焼いたアップルパ
イが食べたかったなあ。

散漫な意識が、けれど途絶えることはなかった。

おそろおそろ、目をあけてみると、男の人の口から、ごぼりと赤
い塊があふれおちるのが見えた。

深々と、自分ののど元にささったナイフをいとしげになでて、彼
はゆっくりと石造りの腰掛の上に崩れ落ちた。

展開についていけなくて、啞然としてしまう。なんで。

「あいつ、自分で自分の喉を刺しやがった……」

この異常な出来事を、わたしはうまく消化できる気がしなかった。そして、そんな時間も与えられなかった。

男の人が崩れ落ちた、その数瞬後、この小さな部屋いっぱいに明るい閃光がひろがった。無数のランタンの明かりも、夜の暗闇も簡単に飲み込んで、白い光に塗りつぶされる。

ねえ、アキちゃん。

わたしたち、これからどうなっちゃうんだろう。

黒い影

うつそうと茂った森の中を、気の赴くままに散策する。木の葉を透かして照るあたたかな陽光と澄んだ空気がきもちいい。

この森はわたくしのお気に入りの場所だった。内緒で□□を抜け出しては、よくひとりでこの空間を楽しんでいた。ここはわたくしだけの場所。わたくしだけが許された場所なのだ。

おだやかな気持ちで大地を踏みしめていると、突如、大きな泣き声が神聖な空間を切り裂いた。

少し甲高く、あまつたれたような、こどもの泣き声。

声の主を探して歩いてみると、すぐに見つけることができた。

ああ、かわいそうに。すっかり怯えて、□に□□かけている。きつと□□の国のこどもなのだろう。このまま放っておいては□に□み□まれて□□になってしまう。そうなってしまえば、□□□□□□することなどできない。

わたくしはこどもを両腕で抱きしめて、あやしてみせた。すこしずつ泣き声がおさまっていく。かわいそうに。このこを□に□す術などあるのだろうか。

ああ、そうだ。わたくしのこの□□□。これをこのこに与えよう。これは□に祝福された□□だ。きつとこのこを守ってくれるだろう。ちいさくかよわいとしごよ。安心なさい。わたくしがかならずおまえを□してみせるから……。

「ううん…… かならず、やくそくするから……」

「リン！ 気がついたのか」

なんだか、背中が痛い。いや、全身が痛くて頭も重くて、気分もわるい。もうちょっとこのまま眠っていたいなあ。

「おい、寝るんじゃない。起きろよ」

しかし、容赦なく肩をつかまれ、がくがくと前後に揺らされる。
なにがなんでも起こすつもりらしい。

「アキちゃん……ひどいよ……」

「なにがひどいもんか。いつまで経っても起きないおまえのほうがひどい」

うつすらと開けた視界に、最初にうつったのはアキちゃんの凶悪な顔だった。目を眇めて、こちらを睨みつけている。ほんきで怒ってるらしい。

ずきずきと痛む頭を押さえながら、わたしはゆっくりと起き上がった。

「今日ってなんかだいじなやくそくでもあったっけ？寝坊してごめんね。だから怒ってるの？」

「は？なに寝ぼけてんの。しっかりしろよ」

アキちゃんにつっぱねられて、わたしはすこしだけ冷静になつて考えた。

しめつばい土のにおい、緑のじゅうたん、光をさえぎるように生い茂る木々。はっぱの隙間からわずかにさす太陽のあかり。頬をなでる風はひんやりとしていて、澄んでいる。正確な時刻はわからないけれど、朝なのだろう。ことりたちのさえずりがときおり耳を打つ。

ここって、山だ。

それもおそらく、わたしがアキちゃんとはぐれた山。

「あ！」

そうだ。わたし、へんな場所につれこまれて、へんなおとこのひとに捕まったんだ。

おとこのひとの首に深々と突き刺さったナイフ。異常な光景に慄いているひまもなく、とつぜん現れた光に飲み込まれて……。

そこから、なにも記憶がない。

もしかして、あのへんな場所から、気を失ったわたしをアキちゃんが連れ出してくれたんだろうか。

「俺も気がついたらここにいた。おまえとまったく同じ状況だよ」
まさか夢……だったなんてことはないだろう。だって、アキちゃんも覚えてるんだもん。あれはたしかに現実にあった出来事なのだ。そう思いたくはないけど。

なんだかすつきりしないまま、わたしたちは再び王都を目指すことにした。

立ち止まっただけでも仕方がないし、積極的に関わりあいになりたくなかったというのも大きな理由だった。

もくもくと下山して、ふもとの村にたどりついたのは、ちょうどお昼をまわった頃だった。

「だーれもないねえ」

村の地名が表記された看板の前をとおって、動物よけかなにかの木柵をまたいで、ぽつぽつと建てられた民家の傍までやってきたが、ここにたどり着くまで、村人の姿を誰一人としてみることはなかった。

お昼時だから、みんな家でごはんでも食べてるんだろうか。

そう思って周りを見てみるけれど、どの民家からもかまどの煙は出ていないし、空腹を誘うよい匂いもしてこない。

「いくら田舎の村だからって、誰もいないなんてことはまずないはずだ」

アキちゃんは小さな民家を片っ端からノックした。けれど、どの民家からも返事はなかった。

村には、不気味な静けさが漂っている。

本来ひとがいるべき場所に、ひとがいない。それを意識すると、急に、この村がなにかとつもなくおそろしい場所に思えた。

臆病風に吹かれたわたしはアキちゃんにおいていかれないように、必死に彼のあとを追った。

そして、わたしたちが最後に訪ねたのは少し高い丘の上にある大きな民家だった。木の盾を意匠にした紋章がドアノブに刻まれている。

この村の村長の家だろうか。

アキちゃんが扉をノックする。一回、二回、三回。何度もノックを繰り返すが、返事はない。

やはり、この村には誰もいないのだ。

じんわりとした恐怖が足元に這いよってくる。一刻も早く、この村を離れたほうがいいんじゃないだろうか。なにかがおかしい。

「ねえ、アキちゃん……」

はやく村を出て、乗合馬車に乗ろう。

そう声をかけようとしたときには、アキちゃんはもう姿を消していた。

村長宅の扉が開いている。勝手に中に入ってしまったらしい。

このまま外にひとりで待っているのも怖くて、わたしもあわてて中にはいった。

玄関をくぐると、まず客間があつた。その奥にはキッチンがあつて、食事をとる大きなテーブルがある。椅子はぜんぶで四脚あつた。四人家族なのかな。怖さを少しでもまぎらわせるために、どうしてもいいことを考える。

アキちゃんはキッチンにいた。堂々と食べものを物色している。

「な、なにしてるの、アキちゃん。誰かが帰ってくる前にはやくでようよ」

「どれも腐ってるな。荒れちゃいないが、テーブルも床もほこりが積もってるし、この家の住人はそうとう長い間留守にしているらしい」

「そんなことどうでもいいよ。ねえ、はやく乗合馬車に乗るところにしようよ」

アキちゃんの腕をひっぱって、ひきずるようにして民家を出る。

民家を出たところで、胸をほつとなでおろす。この村に対して感じる気味悪さは変わらないが、他人の家に土足で踏み入る後ろめたさからは解放されたからだ。アキちゃんってけっこう図太い。

「この村、へんだよ。はやく外にしようよ」

「あんまり引つ張るんじゃないよ。それに急ぐな。転ぶぞ」

とにかく一刻も早くこの場を離れたかった。嫌がるアキちゃんをぐいぐい引つ張って、木の柵を乗り越えて村を出る。小石が敷き詰められた街道と思しき道をずんずん進み、村が見えなくなつたところでやっとひと安心できた。

はー。なんだったんだろう、さっきの村。誰もいないなんてぜったいおかしい。すごく嫌な感じがした。

わたしは山を降りたことがないから、ふもとの村を訪れたのははじめてのことだったけど、アキちゃんはどうだったんだろう。

一歩前を歩くアキちゃんに、なんとはなしに聞いてみた。

「アキちゃん、あの村っていつつもあるの？」

「そんなわけないだろ。あれは異常だ。集団でどこか他の場所に移動したにしろ、緊急的で突発的ななにかがあの村を襲つたのは確かだな」

「そつか。なにもしらなかった」

「俺達の住んでいた森は、正確な意味で隔絶されてるからな……」

そこでふと、アキちゃんは考えるそぶりをみせた。ああ、これはよくない兆候だ。アキちゃんはいちどなにかを考え始めるとまわりが見えなくなるのか、話しかけてもなにをしてもかまってくれなくなる。

その予感は的中で、思考の海に沈んだアキちゃんは、わたしがいくら話しかけてもなんの返事もしてくれなくなつた。

ただもくもくと、乗合馬車乗り場を目指して街道を歩く。

太陽はすぐに西にむかつて沈んで、あたりは飴色に染まっていく。だいぶ歩いた気がするけれど、誰ともすれ違わない。まるで世界には、アキちゃんとわたしふたりつきりみただった。

わたしたち以外の誰かがいない。ふだんは意識しない他人という存在をこんなにも心待ちにするのは、はじめてのことだった。

わたしがこんなにも不安がるのは、きっとあのへんな男のひとのせいだった。わたしたちではない誰かの死を見せつけられて、わた

したち以外の誰かの存在をこんなにも確かめたがらせている。

「……ついたみたいだな」

いつの間にか、思考の海から浮上したアキちゃんが言った。

彼の言葉につられて前方を見てみると、たしかに街道の近くに小屋のようなものが建っている。

あれが乗り合い場なんだろうか。自然と足が速まる。あたりは既に夜の気配に包まれていた。完全に夜になる前に目的地につけたのは幸運だった。

「疲れたねえ。でもうれしいな。馬車でいく楽ちんな旅だね！」

「さすがに今から乗車できる馬車はないだろうが、野宿はせずに見そうだ」

こころなしか、アキちゃんの声も弾んでいた。

しかし、小屋に近づくにつれて、その仔細がわかると、わたしたちは落胆せざるをえなかった。なぜなら、あたりが暗くなりはじめているというのに、その小屋にはなんの灯りももっていなかったからだ。

小屋の扉には、木で作られた白塗りの看板が掛かっていた。『乗り合い場』と彫られた文字の下には『休業中』の文字。

つまり、ここはかつては乗り合い場であつたけれども、いま現在はそうではないということだ。

アキちゃんは小屋の扉に手をかけて、何度か前後に揺さぶった。鍵が掛かっているらしい。

軽く舌打ちすると、アキちゃんは腰に下げた袋から針金を取り出して錠前に突き刺した。地面に片膝をつき、扉に耳をあてて探るように繊細な手つきで針金を動かす。

「アキちゃん……それって……」

「うるせー。いま大事なことだから黙ってる」

まさかの、本日二度目の不法侵入。

アキちゃんは見事に、針金一本で小屋の扉を開けてみせた。同時に、かび臭いこもった空気がむうつと漂ってくる。

「なにしてんだ、さつさと入れよ」

「け、けど……」

「きたねえけど野宿よりはマシだろ。外で寝たいっていうなら、止めないけど」

少し意地悪な言い方で、アキちゃんはわたしの腕をとり、小屋の中に引つ張り込む。

薄暗い小屋の中を見回すと、案外広いことが分かった。

扉からそう遠くないところに、カウンターがある。おそらくここが乗合馬車の受付だったんだろう。待合室らしきところには大きなソファがふたつ並んであって、その向こう側には大きな戸棚がひとつあった。

待合室の中央には、青銅で作られたランプがひとつ吊るされている。アキちゃんは戸棚からランプの油を拝借して、ランプに火をつけた。ほっとするような、橙色の炎が夕闇に揺らめく。

「誤算だったな……まさか乗合馬車が使えないとは思ってなかった」
アキちゃんはひとりごとのように呟いて、ソファの上に腰を下ろした。わたしもならってアキちゃんの隣に座ると、半眼で睨みつけられた。

「ソファならあっちにもあるだろ」

その指摘はごもつともだったので、すぐごと向かい側のソファに移動する。紅色の布で覆われたソファはほこりっぽかったが、すわり心地はいい。勝手に無人の小屋を借りることに対しては抵抗があったが、背に腹は変えられない。せめてあまり汚さないようにしようと思った。

「ほら、食えよ。それが今日の晩めし」

アキちゃんが放つてよこしてきたのは乾パンたったの3枚きりだった。

「これっぽっち？」

「馬車が使えないじゃ、この先どうなるのか分かんねー。食料が手に入る目処が経つまでは節約しねえと」

育ちざかりの身としては、これはつらい。うらめしげなわたしの気配が分かったのか、アキちゃんは嫌そうに眉をひそめた。

「もともとふもとの村で食料とか本格的に揃える予定だったんだ。おまえは変なのに捕まるし、村は無人だし、馬車は使えないしで予定は狂いっぱなしだ。そもそも、おまえがついてくること自体、予定外なんだけど」

「それも人生をたのしくするためのスパイスだよ、きっと」

「いらねー。全力でいらねー」

ふたりで向かい合って、ちまちまと晩御飯……といえるかは微妙だけど、泣き声をあげるお腹を慰めた。

ブーツを脱いで、歩きっぱなしで疲れた足をソファの上に投げ出す。お風呂なんてぜいたくなことは言わないけど、せめて体が拭けたらなあ。水場の近くに寄ることがあったらアキちゃんにお願いしてみよう。

閉じられた空間と、人の手による灯りによってすっかり寛いでしまっているわたしとは正反対に、アキちゃんは熱心に戸棚をあさっていた。

食事を終えたら一気に疲労が襲ってきてしまつて、そんなアキちゃんを咎める元気はなかった。そもそも、この場所で寛いでしまっている時点で、わたしにそんな権利はないんだけども。

「アキちゃん、なにしてるのー？」

「地図を探してるんだ。おおまかなものしか持ち合わせがないから、もつとこの辺りについて詳しい地図がほしい。……おまえも手伝えよ、ばかリン」

ぺしつとわたしの頭を叩いて、アキちゃんが睨んでくる。そんなに怒ってばかりで疲れないのかなあ、アキちゃん。

そんな風に、のんきに過ごしているときだった。

とつぜん、谷底から聞こえる獣のような叫び声が空気を切り裂いた。慌てて飛び起きたわたしはソファから転げおち、アキちゃんは周囲をうかがうように身構えた。

今日は厄日だ。今度はなにが起こっているんだろう。
窓の外を見てみると、もう完全に夜のとばりはおち、真っ暗にな
っていた。

「リン、窓に近づくな」

そういわれて、わたしはアキちゃんの傍に走った。

戸棚を背にして、アキちゃんは窓と扉に注意を払っている。もし
も、仮に、何者かがわたしたちに危害を与えようと進入してくるな
ら、まずそこだった。

「あ、あかり、消したほうがいいかな……」

「……そう、だな」

アキちゃんの返答は歯切れが悪いものだった。

灯りを消すことにためらいがあるらしい。たしかに、外はまっく
らだし、視界が限られるのはあまりよいことには思えない。

けれど、灯りがついていいるということは、そこにんげんがいる
ということが相手にわかってしまうということだ。

さきほどの声の主が灯りのある意味を理解するかはわからないが、
灯り自体がなんらかの目印になってしまうことは確かだった。

そもそも、わたしたちを害する意思があるのか、ないのかも、わ
からないけれど。

再び、獣めいた叫び声が、今度は二度続けて聞こえた。最初に聞
いた声よりも大きく、なにより、思っていたよりも近い！

どくんどくと耳の奥で心臓の音が響く。てのひらはいやな汗を
かいている。アキちゃんの服の裾をつかもうと伸ばした手は、邪魔
だばかりにはねのけられた。行き場を失った手を胸の前で組み、
わたしも耳をすます。

なに食わぬ顔で、見知らぬ何かはとおりすぎてくれただろうか。
それとも。

「あ、アキ……」

「だまつてろ」

どすんつと、小屋全体が揺れた。

大きく体が傾きかけ、あわてて戸棚にすがりつく。かろうじて転倒はまぬがれた。

顔をあげると、ほの暗い室内に、きらりと銀色の輝きが弧を描くのがみえた。腰元に隠していたナイフをアキちゃんがかまえたのだ。なにか、くる！

そう思ったのが先か、そのなにかが到達したのが先か、正確なところはわからない。

目の前で、黒い影のようなものとアキちゃんがもつれ合うように床に転がった。ランプの灯りに照らされて、黒い何かは姿を現す。その何かに陰影はなく、ただただ異様で、黒一色の、生き物と呼ぶことを躊躇わせる存在だった。

いうならば、これは、影そのものだ。

けれど、わたしたちのうしろを無邪気についてまわるかわいらしいものではない。もっと、なにか、まがまがしいものに思えた。

「あ、アキちゃん！」

黒い影が咆哮をあげる。びりびりと空気が震え、窓ガラスががしやんと割れる音が聞こえた。まるで、その圧倒的な力をわたしたちにみせつけるみたいに、影は大きくしなった。

アキちゃんは影の下敷きになってしまっていた。どうしよう。いまはかろうじて右半身が見えている状態だけれど、いずれぜんぶ飲み込まれてしまいそうだ。

わたしはとつさに戸棚をあけて、中に入っているものを黒い影に向かって投げつけた。

お皿やコップ、スプーンといった食器類がつぎつぎと無残な姿で床に散らばる。黒い影はまったく堪えた様子もなく、まるで食事でもするかのように、じわりじわりとアキちゃんの姿を隠していつてしまう。

「この！」

こんなところでアキちゃんを失うわけにはいかない。

そう思うのに、いったいどうすればアキちゃんを助けることがで

きるのか、ぜんぜんわからない。悔しい。こんなことなら、アキちゃんと一緒に魔法を習っておけばよかった。つい最近、同じような後悔をしたばかりだというのに。

そうだ。アキちゃんは、助けてくれたんだ。それなのに、どうしてわたしはアキちゃんの助けになれないんだろ。

「どっかいきなさい！ここはおいしいものなんてなにもないよ！」

わたしは黒い影にむかって体当たりをした。なんども、なんども、なんども！

けれど、影はびくともしない。

それどころか、わたしをもつかまえようとその体を伸ばしてきた。大きな黒い影が、しりもちをついて座り込むわたしにむかって覆いかぶさるうとする。逃げ場はない。このまま、しんでしまうんだろ
うか。

そのとき、影がまつぶたつに割れた。

上下に分断された黒い影は、あっけなく溶けるように消えてしまった。一瞬だった。

「へ……？」

いったいなにが起こったのだろ。

いや、それよりなにより、アキちゃんは無事なんだろうか。

わたしは床に倒れているアキちゃんに駆け寄ろうと立ち上がるが、すぐにへたりこんでしまった。足が震えていることを利かない。なんとという役立たずな足なんだ。

「おや、生きてるね。君達は実に運がいい」

場違いな、なんとも明るい声だった。

声の主はアキちゃんの頭を靴で軽くこつく。すると、ちいさなうめき声が出た。ああ、よかった。アキちゃんは生きている。

ほっとするのもつかの間、声の主はわたしの目の前までやってきた。床にすわりこんだわたしは、声の主を仰ぎみる。

まだ若い、おとこのひとだった。細身の長身で、長めの金の髪をうしろで括っている。少し切れ長の目は、まるで夏の青空のように

澄んだ色をしていた。服装は至って簡素で、あら染めをした麻の服の上から苔色のマントを羽織っている。そしてその左手には、長く鋭い銀色の片刃の剣が握られていた。

じっと見つめていると、急におとこのひとは破顔した。

「なんだ。まだこどもか、残念。そっちの坊主、手当てしてやるから運ぶの手伝ってくれるかい？」

まったく汚れない長剣を鞘にしまつて、アキちゃんのからだを動かそうとするおとこのひとの姿をみて、はじめて、助けられたのだとわたしは実感した。

王様の目

ぱちぱち、と焚き火の爆ぜる音がする。

あたたかな火をみると安心する。こんな風にまっくらな闇に支配された夜はとくに。

毛布にくるまって静かな寝息を立てるアキちゃんに寄り添いながら、わたしは焚き火の前でてきぱきと食事の用意をするおとこのひとを眺めていた。

おとこのひとの名前はカナン。

黒い影を退治して、わたしとアキちゃんを助けてくれたひと。

あの小屋のあたりは危ないから、といって、カナンさんはわたしと気絶したアキちゃんを彼のキャンプ地までつれて来てくれた。

他に仲間がいるのかな、って思ったけど、カナンさんはひとりみただった。

街道近くの林の前に焚き火をして、今晚は野宿をしているらしい。屋根のある小屋のほうに安全に見えるけれど、カナンさんは、街道のほうがあつた黒い影が寄つてこないから安全なんだって教えてくれた。

わたしとアキちゃんを突然襲つた黒い影。あれっていったいなんなのだろう。

「君もたべる？」

「え！」

カナンさんは、焚き火で焼いたほかほかのパンをさしだしている。「あ、あの、そんな、助けてもらったのに食事までお世話になるわけには！」

そのとき、わたしのおなかは、わたしの意に反してぐうぐうと盛大な音をたてた。

は、はずかしい！これははずかしすぎる！

顔を真っ赤にするわたしに対して、カナンさんはくすつと笑つて

頭をなでてくれた。そして、あったかいパンをわたしの手に握らせた。

「遠慮しないでいいよ。育ち盛りなんだから」

「……。はい。ありがとうございます！」

カナンさんは微笑んでいる。なんだか、すごくやさしいひとだ。

焚き火のあったかい火に負けなくらい綺麗なさらさらの金髪に、澄んだ夏の青空のような瞳。ちょっと目の形は鋭いけれど、整った顔立ちで、背だつてとっても高い。なんだかまるで、おとぎ話の中にでてる王子様みたいだ。

「君たち、どうしてあんなところにいたの？」

「あんなところ？」

カナンさんはうなづいた。

「そう。このあたりは黒い影に支配されていて、ずいぶん前に避難勧告が出ているはずだけど」

「避難勧告……。はじめて聞きました」

「おかしいな。すべての村落に到達したはずだけど」

「あ、その、わたしたちすっごい山奥に住んでるんです。村とかじやなくって、家族単位で。だから、かもです」

いまさらながら、あのふもとの村が抜け殻のようになっていた理由を知った気がする。きつと急に避難するようにいわれて、あわててみんな別の場所に移動したんだ。

だから、あんな風に、日常からにんげんの姿だけが切り取られてしまったみたいになつていったんだ。

「そうか。君たちを保護できてよかったよ。家族ってことは、ご両親もまだこのあたりに留まっているのかな？」

「あ！ほんとうだ、どうしよう。アキちゃんのお父さんとお母さんも、たぶんなにも知りません。山の奥でいつもどおり生活してます」「どのあたりに住んでいるのかな。教えてくれれば、保護するように仲間に報せておくよ」

このあたりの地理には疎いんだけど、いままで歩いてきた記憶

を頼りにカナンさんに家の大体の位置を伝える。

おじさんとおばさん、大丈夫かな。いままで平気だったのだから、大丈夫だと思うけれど。

あの黒い影を思い出して、ぶるつと背筋が震える。

いまは平気かもしれないけれど、明日は平気じゃないかもしれない。やっぱり、一刻もはやくおじさんやおばさんも保護してもらうのが一番だと思う。

でも、保護って、カナンさんってなにものなんだろう。

「ところで、君たち、こどもふたりでどこに行くつもりだったのかな」

「えっと、王様に会いに」

ずつと優しい表情を浮かべていたカナンさんの顔が、一瞬、陰しいものになった。

あれ。わたし、なにか変なこと言ってしまったんだろうか。

「王様に？ どうして？」

「あの、えっと……頼まれて……」

「誰に？ いつ？」

「手紙が、きて、それで」

あれ。カナンさんとの距離が、不必要に近い。

さっきまで、焚き火の向こう側にいたのに、急に、ぐつと近くにいる。どうしてだろう。なんだか、怖い。

「それで？」

カナンさん、笑ってるけど、笑ってない。

「……それで……」

「リン、言う必要はない」

アキちゃんの声だ。横をみると、上半身を起こしたアキちゃんが凶悪な目つきでカナンさんを睨んでいた。

「おや、目が覚めたのかい。よかった。影に侵食されている様子もないみたいだね」

「おまえ、誰だよ」

カナンさんからわたしを遠ざけるように、アキちゃんは手でうしろに下がるように伝えてくる。

カナンさん、優しいけど、なんだかいまは怖い。

アキちゃんの背中に隠れるようにして、わたしはカナンさんを伺った。

少しだけ考えるそぶりをみせてから、カナンさんは口をひらいた。「僕は、王様の騎士。この国の隅々まで、王様の意思を伝えるべく活動している。たとえば、君たちのように影に襲われているひとを助けたり、まだ影の土地に留まっているひとを避難させたり、いろいろしてるよ」

王様の騎士！なんだか、すごく遠い世界のひとみたいだ。

でも、言われて見れば納得かもしれない。困っているわたしたちを助けてくれたし、さっきちょっと怖かったのは、王様に関する話でたから、警戒したのかも。だって、王様って言葉を出す前のカナンさんは、ほんとうにほんとうに優しくかったのだ。

けどアキちゃんは、目を半眼にしてカナンさんに悪態をついた。

「うさんくせー」

「僕は嘘はついていないよ。さて、僕は正直に答えた。君たちはなにもので、どこに行こうとしているのかな？」

カナンさんのまっすぐな目。

嘘をつくことを許さない、そんな目だ。

アキちゃんは、ふっと息を吸い込むと、騎士であるカナンさんを真正面から見つめた。

「俺はアキサリス。魔術師だ。こっちのチビはリン。ふつうの人間だ。俺たちは、王都に用がある。それだけだ」

たしかに、嘘はいつていない。いろんなことをはしょってるけど。「そう。そちらのお嬢さんは、王様に会いにいくと言っていたけれど」

「は？」

とたん、アキちゃんの怖い目がわたしに向けられる。

薄氷のような冷たい色の瞳に浮かぶ色は、苛立ちだ。わたしはあわてた。

「だ、だってだって、王都のえらいひとに会いに行くんでしょ？えらいひとっていったら、王様じゃないの??」

「……。憶測で勝手に他人にぺらぺら話すなよ、リン。めんどろなことになるだろ」

心底あきれたといった感じでため息をつかれ、軽く頭を叩かれる。すると、カナンさんは瞠目して首をかしげてみせた。

「おや、彼女の勘違い?」

「まあ。とにかく、俺たちは王都に用がある。べつに、悪さしに行くわけじゃねーし、騎士さまの目のかたきにされるような覚えもない」

「……そうか。最近、不穏だから、少し神経質になっていたみたいだ。ごめんね」

カナンさんはアキちゃんの言葉にいささか得心がいかないようだったけれど、ひとまず疑問はおさめてくれたみたいだった。

「お詫びといっってはなんだけれど、君たちを王都まで送ってあげよう。少し寄り道をするけれど、安全は保障するよ」

それは、願ってもない申し出だった。

わたしはもちろん、よろこんだ。だって、カナンさんは騎士で、黒い影に対抗できる力をもつひとだ。そんなひとが同行してくれるなんて、こんなに心強いことはない。

「わあ。よかったね、アキちゃん!」

「……。いらねー」

「どうして??カナンさんがいてくれたらすごく心強いよ。あの変な影だって、怖くないよ!」

わたしの言葉を無視して、アキちゃんはカナンさんに向き合う。

「この辺で王都行きの馬車が出てる町を教えてくれ。あとは自力でなんとかできる」

「そう?けど、君たち、お金はあるの?」

「馬車に乗れるくらいは」

「黒い影が出るようになってから、危険になったからね。とてもじゃないけど君たちが払えるような金額では、馬車には乗せてくれないよ」

おかね……。

急に現実的な問題が立ちふさがった。

「意地悪で言ってるんじゃないんだ。事実を伝えているだけで。僕だって、君たちみたいなことをこんなところに放り出していくのは忍びない。それだけなんだ」

カナンさんは、まるで諭すようにアキちゃんに告げた。

「アキちゃん、カナンさんがああ言ってくれてるんだよ。せっかくだし、甘えようよ」

「おまえさ、ただ単に単純なんだよ。簡単に懐柔されてるんじゃないよ」

アキちゃんは眉をひそめて、険しい顔をしていた。

きっとアキちゃんも迷っているんだ。どうすればいいか。わたしの中の答えは決まっている。アキちゃんを説得しよう。

「けど！また、あの黒い影に会っちゃったらどうするの？」

「次は俺がうまくなんとかする。大丈夫だ」

アキちゃんはかたくなだった。

なんでもやろうとすることは悪いことじゃない。けど、助けを差し伸べてくれている手を跳ね除けて、進もうとするのは賢いことだろうか。

きっと、アキちゃんはいろんなことを考えて、躊躇っているんだろう。

けど、わたしの中では、あの光景が、アキちゃんが黒い影に覆われてしまったときに感じた恐怖でいっぱいだった。

もしかしたら、今後、またおなじことが起きるかもしれない。もしそうなったとき、わたしではアキちゃんを救えない。でも、カナンさんなら助けられる。

アキちゃんを失うのは怖い。

けど、王都には行かなくてはならない。

「アキちゃん、わたし、いやだよ。もしも、また、アキちゃんが黒い影に飲み込まれそうになっちゃったら……アキちゃんがしんじやうのは嫌だよ。もうあんなの見たくないよ。だから、カナンさんと一緒にいこうよ」

アキちゃんはわたしを見て、戸惑ったように目を泳がせた後、舌打ちをした。

「……ちつ。わかったよ。リン。だから、泣くなよ」

困ったような声音とはうらはらな乱暴な手つきで、毛布を顔にぶつけられる。

毛布をみると、小さな染みが広がっていた。どうやら、わたしは泣いてしまっていたらしい。

「話はまとまったかな？」

「ああ。けど、その前に。あんた、王の騎士だっていつてたな。証拠はあるのか？」

「あるよ。この首飾りは騎士の証。しってるかな？」

カナンさんが見せてくれたのは、薔薇と剣の意匠が施された銀色の首飾りだった。アキちゃんの首飾りと少し似ているかもしれない。いまは、服の下にしまわれてしまっていて見えないけど、赤色の宝石は薔薇の形をしていたように思う。

「ほんもののなの？アキちゃん」

「ああ」

アキちゃんは、ほんの少しだけ警戒を解いて、カナンさんに向かってぺこりと頭をさげた。

わたしもあわてて、アキちゃんにならう。

「迷惑はかけないようにする。だから、よろしくおねがいします」
そんなわたしたちにむかって、カナンさんは、やさしく微笑んできた。

霧の村

王都に向かう道すがら、カナンさんにあの黒い影について尋ねてみた。

「僕たちも、影について、はっきりとしたことは分かっていないんだ。遙か昔から、この国では黒い影の存在が確認されているけれど、ここ十年ほどで急激に増えた。結果、国の一部は影にのつとられてしまっているような状態だ。影は僕たちを侵食し、僕たちと同化する」

「のみこまれたら、どうなるんですか？」

「わからない。いま、僕たちにできるのは影を追いつくことくらいで、根本的な解決はできていないんだよ。この国の王様も、他のヒト族の族長たちも、頭を抱えているし、頼りの神の子も沈黙を守っている」

カナンさんは、憂いを帯びた表情で、ため息をついた。

あまり現実感がないけれど、国全体で大変なことになっているらしい。

「他のヒト族とか、神の子ってなんのことですか？」

ずっと黙って歩いているのも苦痛なので、疑問に思ったことも聞いてみる。すると、カナンさんはすごく驚いた顔をした。

「君、本気でいつてるのかい？」

「リン、おまえってほんとうにバカだったんだな」

ずっと黙っていたアキちゃんが、反応しなくていいところで反応してきた。

目を半眼にして、ばかにしたように口をゆがめて笑っている。ひどい。

「だ、だって、ずっと山奥にいたんだもん。しかたないよ」

「環境を言い訳にするなよ。俺だっておまえと一緒にだ。けど、この

国の成り立ちも、かたちも、一般常識的なことは知ってる」

「ぬけがけだ！アキちゃんずるい！」

わたしたちの言い争いを、カナンさんはやんわりと仲裁する。

「まあまあ、知らなければ、知ればいいんだよ。他の種族というのは、僕たち人間以外のヒトのこと。精霊族や、獣人族が代表的かな。精霊族は実体をもたないヒトで、とても知能が高い。長命で、鉱石や樹木などの自然物に好んで棲んでいる。獣人族は獣と人間の中間みたいなヒトで、身体能力にとっても優れている。反面、魔術なんかは苦手みたいだね」

「ふむふむ」

「この国を統治しているのは人間の王様だけど、いろんなヒト族が暮らしている国だから、それぞれのヒト族の代表みたいなひとが族長って呼ばれていて、王様に色々と進言して、よりよい国づくりをしようとしているんだよ」

流暢に話すカナンさんの言葉を引き継いで、今度はアキちゃんが話し出す。

「神の子ってのは、この国を作った男神のこどものことだ。神の声を聞き、すべてのひとの幸いのために国を見守る存在っていわれている。うさんくせー話だよな」

「はは。この国の偉いさんが聞いたらすごく怒るよ、それ。僕も正直、うさんくさいっていうのには同意だけれどね」

朗らかに笑うカナンさんとは対照的に、アキちゃんは軽く肩をすくめて口をつぐんだ。

それから、カナンさんは物を知らないわたしにいろいろなことを教えてくれた。

たとえば西のほうには魔法使いだけの都市があったり、東には精霊族のたくさんすむ鉱山があるんだって。どんなところが想像もできないけど、聞いているだけでわくわくした。

そんなとき、ふと、目の前がぼんやりとした白いもやに覆われていることに気がついた。

「おや、霧が出てきたみたいだね……。はぐれないように。この街道の先に、村がある。避難していい住民がいなかどうか確かめないといけないから、ちょっと時間をもらうけど、いいね？」

カナンさんが指差したのは、大きな街道から横道にずれた、小さな街道だった。

わたしたちはカナンさんに従って、霧の中を進む。はじめは整えられていた道も、しだいにでこぼこになり、緑の匂いが濃くなった。空を見上げると、ぼんやりとした白い太陽が中天に差し掛かっていて、そろそろお昼だな。なんてことを考えていたら、アキちゃんの背中に顔をぶつけた。

「どうしたの？急に立ち止まって」

「なにか、おかしい」

おかしいのはアキちゃんだ。

難しい顔をして立ち止まっていたら、カナンさんからはぐれてしまふ。

考え込むアキちゃんの背中をぐいぐい押してちょっと歩いていくと、急に霧が晴れた。ちょうど道の脇に看板が立っていて、その看板の前でカナンさんはわたしたちを待っていてくれた。

「行こうか。村はすぐそこだよ」

「はい」

そして、わたしたちは小さな村に到着した。

その村にはたくさんひとがいて、がやがやと活気にあふれていた。家の外で炊き出しを行っているようで、とてもいいにおいが漂ってくる。

「こんにちは。みかけないひとね」

村の入り口の前で立ち止まっていると、綺麗なおんなのひとに声をかけられた。長い黒髪を丁寧にひとつにまとめていて、服装は簡素だけれど清潔感があった。

「あの、えと、わたしたち、王都に向かってる途中なんです」

「あら。じゃあ旅をしているのね。すてき。それに、あなたたちと

つても運がいいわ。今日はお祭りの日なの」

おんなのひとは、にっこりと笑って、わたしたちを村の中へと導いてくれた。

「私の名前はエルゼ。外のひとが来てくれるのは久しぶりよ。うれしいわ。せっかくだからゆくりしていつてね」

エルゼさんはとても気さくな感じのひとで、今日の炊き出しは食べ放題であることや、お祭りは明日の朝まで続くことなど、いろいろ親切に教えてくれた。

「深夜になると、村の者はみんな仮面をかぶるの。悪い霊に魂をとられないように顔を隠して、みんなで火を囲んで朝まで踊るのよ。よかったら、あなたたちも参加してみたらどうかしら。仮面は炉辺でまだ売ってると思うわ」

「へー。楽しそうだねえ。ね、アキちゃん」

村の炊き出しのおかげですっかり満腹になったわたしは、とても上機嫌だった。

しかし、アキちゃんはまだしも、カナンさんまで難しい顔をして考え込んでいる。

無愛想な男たちは放っておいて、わたしは親切なエルゼさんと村を一緒にまわることにした。

似たような小さな木造の家が、小さな池を囲むように並んでいる。道端のあちこちには花が植えてあった。池のほうに目をむけると、祈りをささげる一体の乙女の石像がたっており、そのすぐ傍にはまるで彼女を守るように大きな木がそびえていた。

「おねえちゃん、どこからきたの？」

「おねえちゃん、どこにいくの？」

お祭りに使うんだろう、秋に咲く色とりどりの花を腕に抱えた小さなこどもたちがわたしとエルゼさんを囲んだ。

くりくりとした大きな目には好奇心が宿っていて、いまにもあふれ出してしまいそうだ。かわいいなあ。

「えっとね、王都にいくの」

そう答えると、こどもたちは口ぐちに叫んだ。

「すごい！あたしもいつてみたいなあ」

「おおきくなったら、ぜったいいく！」

「たっくさんのひとがいるんだよね。それで、たっくさんおいしいものがあるんだよね！」

目をきらきらさせて、駆け回る姿はげんきいっぱい、見ているだけで元気になれそうだ。

王都ってわたしも行ったことがないから、実際どんなところかは分からないのだけれど、すてきなところだったらいいなって思った。はしゃぎまわるこどもたちからお手製の花飾りをひとつもらって、わたしとエルゼさんは池の傍に寄った。

池の真ん中は陸地になっていて、両膝をついて祈りを捧げる乙女の石像が立っている。

きらつと光るものが見えて、よくよく目を凝らしてみると、少し伏せられた乙女の両目には水晶のような石がはめられているようだった。

「この村が出来る前から、あの石像はあったのよ。いつの時代かは分からないけど、ある青年彫刻家が貴族の令嬢にかなわぬ恋をして、その想いを閉じ込めるために作ったのがあの石像なんだって」

「そうなんだ。ロマンチックだねえ」

「でしょ。祈る乙女の両目は、青年の想いが結晶化した石で、それに触ると恋が叶うっていわれてるの！」

「ええ！」

「……っていう噂話を広めたら、ちょっとした村おこしになると思わない？」

「冗談だったらしい。ぺろつと舌をだして、エルゼさんはいたずらの見つかったこどものように笑った。

見た目は、長い黒髪に神秘的な紫の瞳の、おとなっぽい綺麗なおんなのひとなのに。

かわいいなって思った。

寄り道をしながらエルゼさんと話していたら、村の入り口に戻ってきていた。

おおよそ十数分も歩けば一周できてしまいそうな小さな村だったけれど、お年寄りからこどもまでたくさんのがいた。みんな村のひとで、外から来ているのはわたしたち三人だけらしい。

「ここは街道に近い村だけれど、少し南にいったところに大きな町があるの。旅人はみんなそちらの町に滞在するから、この村に立ち寄るのは商人さんくらいよ」

エルゼさんがそういうと、炊き出しを作っているおばちゃんがついた。

「この村には木彫りの置物くらいしか特産品がないからねえ」

「いい村なのだけれどね。ふだんひとの出入りがないから、宿とかもないのだけど。……たしか一番北側の家は空き家のはずだから、今夜はよかつたらそこに泊まっていてよ」

人好きのするやわらかい笑顔でエルゼさんが言った。

おばちゃんも、名案だとばかりに「それがいい、それがいい」と薦めてくれている。

村のお祭りにも興味があるし、やはり、屋根のあるところで眠れるというのは、非常に魅力的だった。

「ありがとう！えへへ、お言葉に甘えることになるかも」

「鍵はかかってないから、好きに使ってくれても大丈夫。ふふ。うれしな。そうだ、仮面も持っていて」

エルゼさんは炉端で仮面を売っているおじさんに「二、三言つげると、木製の仮面をみつつもわたしにくれた。でも、これはさすがに悪い。売り物をただで貰うわけにはいかない。」

「あの」

「いいから！だって、今日はお祭りなんだもの。もともと村人しか参加しないし、おじさんだってはなっから売れるつもり、なかったって」

そうなんだろうか？ちょっと色黒の仮面売りのおじさんを伺って

みると、おじさんは無言でうなずきを返してくれた。

お金はアキちゃんが全部管理しているので、わたしはいつさい持つていない。

どうするべきか考えあぐねていると、エルゼさんにぐいぐいと背中をおされた。

「いいからいいから。連れのおふたりにもよかったら参加してねって伝えておいて。やっぱり、参加してくれるひとは多いほうが楽しいもの」

「は、はい！」

「じゃあ、私はちよつと準備の手伝いもあるからここで失礼するね。また、あとでいろいろ話しましょ！」

そうして、エルゼさんと手を振って別れる。

アキちゃんとカナンさんは、村の入り口から少し離れた木陰に座っていた。腕の中にあるみつつの仮面を確かめてから、わたしはふたりに近寄った。

「おかえり。急に姿が見えなくなったから心配したよ」

カナンさんは、わたしの姿をみると、立ち上がって駆け寄ってくる。背の高いカナンさんを見上げて、わたしは言った。

「ごめんなさい。ふたりとも考え事してたみたいだし、暇だったからエルゼさんに村の中を案内してもらったんだ。なんかね、今日はお祭りだね、泊まっていいよっていいよってしてもらえたよ」

ふふんつとわたしは胸をはった。寝床をゲットは、けっこういい成果だと思う。

けど、カナンさんはあまりいい顔をしなかった。

「そうか……。少しね、考えていたのだけれど」

「この村はおかしい」

いつの間に近くに来ていたのか、アキちゃんが険しい顔で村を睨んでいた。

カナンさんも、アキちゃんの言葉に異論はないようだった。

「僕たちは、危険と思われる地域の村落に対して、たしかに避難勧

告を行い、彼らをより安全な町に連れて行った。もちろん住み慣れた故郷を離れることに対して難色を示す人々もいたけれど、黒い影の恐怖を実感すれば、理解してくれた」

一呼吸おいて、カナンさんは憂いを帯びた瞳で村を見据えた。

「つまりね。こんなに村人が残っているわけがないんだ」

祭りの夜

わたしは混乱した。

「いったん避難して、また戻ってきた、とか」

「それはないよ。ここから南に大きな町があるのだけど、そこで検問が行われている。地理上、その町を通らずにこの地にたどり着く手段はないんだ。険しい山脈を越えれば戻ってこれないこともないけれど、お年寄りやこどもにはまず山越えは無理だよ」

村人が残っているわけがない村には、いま、たくさんのひとがいる。

おじさんも、おばちゃんも、こどもたちもエルゼさんも、残っている。

黒い影のことなんて、なにも感じさせない穏やかな村だ。そんな村に住むおだやかな村人たち。なにもおかしいところはない。おかしいところはないはずなのに。

「じつは、最初から避難していなかったのかも」

「それもありえない。いまはほぼ全ての村落の退避が終わり、とりこぼした住民がいらないか調査している段階だ。こんなに大勢の村人がいること自体がありえないんだよ」

カナンさんは、しきりにありえないと繰り返すけれど、そのありえないことが実際に起こっている。

この状態に説明はつけられないけれど、まずは、住民を避難させるのが先決なのではないだろうか。うん。めずらしくわたし冴える気がする。

そう進言すると、カナンさんは静かに首を振った。

「何人かの村人に黒い影のことを伝えたのだけど、まるで反応がないんだ」

「ええ？」

「危険なのだと伝えても、笑って流される。次の瞬間には、なにもなかったかのように祭りのことを口にする。彼らはどこかおかしい」
カナンさんは嘆息し、困ったようにわたしたちを見つめた。

「いちど、大街道に戻ろう。仲間に連絡をとって対策を考えることにするよ。君たちを危険に巻き込むわけにはいかないからね」

腕の中にあるみつつの仮面。

真ん丸いお面に、目ののぞき穴と、呼吸をするための口元の穴。ちよつと不気味で、けど愛嬌がある。

村のお祭り、参加したかったな。せつかく、エルゼさんが仮面をくれたのに。

せめて、彼女に別れのあいさつをしたかったけれど、アキちゃんもカナンさんも許してはくれなかった。

日が傾ききらない内に、大きな街道に戻るため、わたしたちは急ぎ足で村を去った。

整備されていない細い街道。でこぼこ道を歩くのも慣れてきた。

やっぱり道の途中で霧がかってきて、周囲の詳しい風景はわからないけれど、そろそろ大きな街道にたどり着くだろう。

そう思っただけ顔を上げると、前を歩いていたアキちゃんが立ち止まっていた。

またもやアキちゃんの背中に顔をぶつけてしまったわたしは、抗議の声をあげる。

「もー。あぶないよ」

「……やっぱりな」

なにが、やっぱりなんだろう。

わたしが訝しんでいると、先頭を歩いていたカナンさんがあわてた様子でわたしたちの元に駆け寄ってきた。

「ごめんごめん。霧にまかれて方向を間違ってしまったみたいだ」

背伸びをして、アキちゃんの背中越しに前を見てみると、霧のむこうにうつすらと人家の影が映っているのが見えた。

どうやら、村に戻ってきてしまったらしい。

「暗くなってきたし、仕方ないよ」

「リンちゃんは優しい女の子だね。お兄さんは非常にこころが救われたよ」

よほど、道を間違えたことがカナンさんはショックだった様子で、がつくりと肩を落として、それからわたしの頭をなでてくれた。

「えへへ」

頭、なでられるの嫌いじゃないかも。

このときわたしは、よほどしまりのない顔をしていたんだろう。

アキちゃんが横目であきれたようにわたしを見て言った。

「おまえみたいにトロクせー奴が道を間違えるのなら信憑性はあるけどな」

「どういう意味!？」

「聞いたとおりだろ。カナンさん、俺たちは道を間違えたんじゃない。道を間違えさせられている」

アキちゃんは断言した。

「村の外に出ようとしたって無駄だろう。俺たちは何度でも、この村に戻ってくる。おかしい感じはしていたんだ」

「つまり？」

「俺たちは、この村の何者かの魔力によって、村に閉じ込められてしまったってことだ」

そんなこと、ありえるんだろうか。

アキちゃんの言葉を聞いたカナンさんは、難しい顔をして、霧のむこうにみえる村を見据えた。

「アキサリス君、君は魔術師だといっていたね。僕はあいにく、魔術の才能はさっぱりで、あまり実感が無いのだけれど。僕たちは村に潜む何者かによって、人為的に村の外に出れなくされた。ということかな」

「ああ。周囲の魔力の流れがあつた村を中心にして、いびつな流れになつている。術者は間違はなく村内にいるな」

「けど、アキちゃん、なんのために？」

「それが分ければ、苦労はしねーよ」

ごもつとも。

わたしたちを閉じ込めるひとが本当に村にいるとして、一介の旅人を軟禁してなんになるっていうんだろう。

得をするひとなんて誰もいない。それとも、わたしがなにか見落としているだけののだろうか。

考えていても答えが出るわけでもないし、村から離れられないのであれば、せめて、暖のとれるところに移動しようということになった。このあたり一帯が術者のテリトリーになっているので、魔術的な脅威は変わらないってアキちゃんも言っていた。

裏手から村に入り、エルゼさんが紹介してくれた空き家にたどり着く。鍵は掛かっていなかった。木組みの小さな空き家で、定期的に掃除がされているのか、埃ひとつない綺麗さだ。

玄関はなく、扉を開けばすぐに室内という簡素な家だが、じゅうたんもソファもあって居心地はとってもよさそうだった。

ソファに座って、四角い窓から外をみると、もう日は暮れかかり、村の景色は夕焼け色に染まっていた。

「そろそろ、お祭りの踊りがはじまるのかなあ」

「さあな」

手荷物をほどいて、アキちゃんは黙々と整理整頓をしている。

カナンさんも、腰に下げた剣の手入れをはじめていて、かまってもらえるような雰囲気ではない。

しばらくわたしはソファの上で足をぶらぶらさせていたが、外が夕闇に包まれるころにはおとなしくすることに飽きてきた。

よし。

お祭りにいってみよう！せっかくだし！

「は？おまえ、馬鹿？それとも俺の耳がおかしいの？」

と、アキちゃんに真っ向から反対された。

「術者が村にいるって言っただろ。わざわざ危険な場所につっこむ奴があるかよ」

「でもでも。この村とその周囲一帯はすでに術者さんのテリトリーなんですよ？なら、村の中にいようが外にいようがたいして変わらないって」

「あくまで魔術的には、だ。人為的な脅威は読めない。相手に敵意があるかも不明だが、下手に動かないほうがいい」

アキちゃんは慎重だ。顔は無茶をしそうな悪人面だというのに。ふくれるわたしに、救いの手をさしのべてくれたのはカナンさんだった。

「虎穴にはいらずんば虎子を得ず、ともいうし、一度、その村の祭りの偵察に行く必要はあるかもしれないね」

「うんうん！ていさつ、ていさつ！」

「おまえ、ぜったい暇つぶししたいだけだろ」

わたしとアキちゃんをおいて、カナンさんひとりで偵察に行くか否かでもめたが、結局、離れるよりは固まって行動したほうが安全だろうという結論におちついて、はれてわたしは村のお祭りに参加することになった。

エルゼさんも、参加する人数は多いほうがいいっていったもんね。

あからさまに不満げなアキちゃんと、装備を整えてきりつとしてるカナンさんに、わたしはエルゼさんからもらった仮面を渡した。目の部分にふたつ穴と、口もとにひとつ穴がいている木製のシンプルな仮面で、かぶってみると、ぱっと見、誰が誰だか分からない。

「はぐれるなよ」

アキちゃんに、念を押された。

すっかり暗くなった外。冷たい夜気に身震いする。周囲の人家には明かりが灯っていなかった。村人総出で祭りを行っているんだろう。

遠くに、夜空を焦がす赤い炎が見えた。ちょうど村の中心にある池の真ん中の陸地で、燃え盛る炎。それを囲むように、輪になって

踊る村人たちの長い影がうねりながら地面に伸びている。

老いも若いも、みな一様に仮面をかぶって、踊る姿は、誰もがまったくおなじ人間のように見えた。炎を中心にしてひとつの生き物が、しずかに呼吸をしているようだ。

踊るひとびとと、うねる影。

じつと見つめていると、どちらが影で、どちらが本物なのか分からなくなってくる気がした。

「来てくれたのね、嬉しいな」

はっと、わたしは振り向いた。エルゼさんが笑っている。

一瞬気が遠くなっていたみたいだ。わたしは頭を振って、気をしっかり保った。

「うん。せっかくだから。でも、わたしだってよくわかったね」

仮面を外そうとすると、そつと腕に手を添えられてエルゼさんに止められた。

「お祭りで仮面を外すのはマナー違反よ」

「え。でも、エルゼさん」

あれ。さっき、たしかにエルゼさんの笑顔を見た気がしたんだけど。

エルゼさんは仮面をかぶっていた。夜の闇にとけてしまいそうな黒いガウンとスカート、手袋をはめている。

「さ。リンちゃんも踊りましょう。朝までずっと踊るの。過去も未来もみんなひとつになって、新しい朝をむかえるの」

誘うように、エルゼさんの黒い手が差し伸べられる。

「うん！あ、けど、アキちゃんとカナンさんも誘わなきゃ」

エルゼさんの手をとって、わたしはまわりを見渡した。一生懸命さがすけれど、ふたりの姿はいっこうに見つからない。

「ふたりはもう先に、踊っているのではないかしら。ね。早くいきましよう。早くしないと、黒い影につかまってしまいうわ」

「……え？」

黒い影をエルゼさんは知っている。

危険を知っていて、なぜ村に留まっているのだろう。

わたしは、仮面の奥に隠された、エルゼさんの紫色の瞳を見つめる。

つながれたわたしとエルゼさんの手。その手を振り払う気は起きなかった。彼女が危険だとは思えない。

「ああ、また、やってきた。私の村に、黒い影が」

わたしの手をぎゅっと握って、エルゼさんは震えていた。

急に足元がひえびえと冷えてきて、さきほどまで燃え盛っていた炎が一瞬で消えた。村人たちの姿も見えなくなつて、わたしとエルゼさんだけが、暗闇に取り残されてしまったかのようだ。

「リン、逃げろ！」

アキちゃんの声が遠くから、けれどはっきりと聞こえた。

どこにいるんだろう。声は聞こえるのに、姿がみえない。不安がわたしを、エルゼさんのあたたかな両腕がやさしく包み込む。

エルゼさんの肩越しに、わたしは見てしまった。暗闇から分離するように現れる黒い影たち。

ひとの形をしたそれは、わたしたちを取り囲み、じわりじわりと間合いをつめてくる。

逃げなきゃ。でも、どこに？

黒い影がわたしの頭をめがけて突進してくる。怖い。でも、逃がられない。わたしはぎゅっと目をつむった。

痛みはなかった。

耳元で、かすかな声。

「こんどこそ、守ってあげる。私の大切な」

エルゼさんがかばってくれたのだと、ようやくわたしは気がついた。

このままでは、エルゼさんが影に取り込まれてしまう。わたしはまた、なにもできないのだろうか。アキちゃんのとくと同じように。「だめ！エルゼさん、一緒に逃げよう！」

「いいの。私にも、ちゃんと守ることができて、嬉しい」

からんと、エルゼさんを隠していた仮面が落ちて、闇に吸い込まれていった。

エルゼさんは笑っていた。泣いていた。後悔していた。嘆いていた。悲しかった。寂しかった。つらかった。エルゼさんの隠していたごちゃまぜの感情が、一気に胸を突き抜ける。

いい村だった。この村が好きだった。

たくさんの人々を見てきた。みんな私のこどものようなものだった。

のどかな風景。きらきらした日々。

笑顔を浮かべるあのこと一緒に笑って笑って。

悲しみにくれるあのこの頭をそつとなでて。

ずっと、永遠に続いていくと思っていた。

あの日。

黒い影に取り込まれる村人たちを、私はただ見ていることしかできなかった。

悲鳴。嘆き。悲しみ。恐怖。絶望。静けさ。

どうしても、私には彼らを傷つけることができなかった。

分かってしまったからだ。彼らは。彼らも。

どっちつかずの私は、結局、誰も守れなかった。そして村は――。

そのとき、白い閃光が闇を切り裂いた。

カナンさんだ。彼はわたしたちを取り囲んでいた黒い影を次々と切り伏せていく。

一瞬、なにかおかしい光景を垣間見てしまった気がするけれど、ともかく、これで助かるはずだ。わたしも、エルゼさんも。

「エルゼさん、もう大丈夫だよ。カナンさんが来てく――」

「やめて――！」

それは悲鳴だった。

エルゼさんは青ざめた表情で影たちの消えたあとを見つめている。

けれど、カナンさんは止まらない。エルゼさんの背にはりついた影を切り落とし、蠢く影たちのすべてを切り裂いた。

最後の黒い影が消えたとき、周囲の風景も元に戻った。……いや、少し違うところもあった。

煌々と燃えていた炎など最初からなかったかのように。村人など最初からいなかったかのように。

すっかり寂れて、ひとけのなくなった村を青い月が見下ろしている。

わたしとエルゼさんは、村の中心にある池の陸地に座り込んでいた。

「やっぱり、私はまた守れなかった。みんな去って行ってしまふ。誰一人、助けられない」

うわごとのように、エルゼさんはそう繰り返す。

いつの間に背後に立っていたのか、アキちゃんはわたしを見下ろしたあと、そっとエルゼさんの隣に片膝をついて、彼女に声をかけた。

「あんたは、精霊族だな。それも、とても古い」

うるんな目で、エルゼさんはアキちゃんを一瞥した。

「どうして分かるの？」

「身体が透けてる。本来肉体をもたない存在の証だろう」
本当だ。

エルゼさんの身体の感触はあるのに、地面が透けて見えている。

「次に、古い精霊というのは、力が強い。小規模とはいえ手の込み入った茶番を演じられるのは力のある証拠だろう」

アキちゃんの言葉を聞いて、エルゼさんは諦めたように遠くを見た。

「そうよ。私は、この村にたったひとり残された。みんないなくなってしまった。黒い影に襲われて、たくさんの子らが消えてしまったわ。生き残った子たちも、みんな遠くにいつてしまった」

言葉を一度切って、エルゼさんはわたしたちに向かって頭を下げ

た。

「ごめんなさい。また、昔みたいにお祭りがしたくて、ひとりで村人たちの姿を模して遊んでいたら、あなたたちが現れて……寂しかったの。だから、少しでも長く、いてほしくて。ごめんなさい。危険な目にあわせるつもりはなかったの」

やっとわかった。

カナンさんが、わたしたちを助けてくれる前に、ほんの少しだけ垣間見えた風景。

あれって、きっと、村に幸せがあふれていたころの姿なんじゃないだろうか。

「はた迷惑だな」

「アキちゃん！」

「俺は事実を言ってるだけだ。あんたのおかげで、俺たちは酷い目にあった」

相変わらず、アキちゃんは容赦がない。

結局、みんな無事だったのだからいいのに。

わたしが口を挟む前に、アキちゃんは、思ったよりもいたわりを込めた目でエルゼさんを見つめた。

「だが、あんたはリンを守ってくれた。そこは感謝してる」

「……私は、守れたの？」

「でなきゃ、このバカは、こんな能天気にな笑ってねーよ」

うんうん、そのとおりだ。能天気はよけいだけど！

けど、誰もいない村で、ずっとエルゼさんはひとりで過ごしていくのだろうか。これからも。

それは考えるだけで、とても寂しいことに思えた。

「ねえ、エルゼさん。よかったら、わたしたちと一緒に旅をしようよ」

だから、わたしはエルゼさんの両手を握って、思いつくままに言葉を重ねた。

「王都にね、いくんだけど、きっと楽しいよ。村のひともしるかも

しれない。ね。ここでひとりでいるより、ずっといいよ」

ぽかんとした表情を浮かべて、エルゼさんはわたしとアキちゃんを交互に見比べた。

まるで、そんなこと思いもつかなかったとでも言いたげな様子だ。「精霊族は鉱石などを好んで棲家に行っているわけだが、あんたはなにに宿ってるんだ？」

「……これ」

エルゼさんが指差したのは、祈りを捧げる乙女の石像だった。

乙女の両目にはめられている石がエルゼさんの今の棲家らしい。

石像によりかかっていたカナンさんは、石像を検分してつぶやいた。「うーん。これはちよつと、持ち運びできないねえ。石像の目をえぐりだすのも忍びないね」

たしかに。見た感じ、石像は年代物のようだし、芸術品を壊すのは気が引ける。

「棲家って簡単に換えられるの？」

「簡単ってわけではないけど、不可能ではないだろうね」

カナンさんの返答を信じて、わたしはなにか他にエルゼさんが棲家にできそうなものがあるかどうか考えてみた。

「アキちゃんの首飾りはどうか。綺麗な石だし」

「は？」

「王都についたら、もっと別のすてきな棲家を探すとして、当面はあれで我慢！どうですか！」

「うん。連れて行ってくれるだけで、うれしい」

「おい。俺の意見を聞く気はなしか」

「異論あるの？」

アキちゃんは押し黙った。

他に手がないのだし、これが現状ベストな選択だと思う。

気がつくと、東の空がわずかに白みはじめていた。いつの間に、こんなに時間が経ってしまったんだろう。

そう意識すると、なんだか急に眠気が襲ってきた。うとうとと

していると、半透明なエルゼさんがわたしの傍によりそって、優しく髪を撫でてくれたような気がした。

花の街・恋の街 1

「ねえねえ、アキちゃん。ふと思ったんだけど、アキちゃんの魔法で王都までぴゅーんって飛んでいけないの？」

思い出したくないけど、王都への旅を始めた直後。わたしが変なおとこのひとに捕まったとき、アキちゃんはわたしのところへ飛んできてくれた。

あんな感じで、移動することって出来ないのかな。

「移動魔術は繊細なんだ。少なくとも、一度行ったことのあるところでないとい飛べねー」

「ふーん。じゃあなんで、あのときわたしのところに来れたの？」

「……。おまえがバカ面してるから」

なぬ！？という意味！

追及しても、アキちゃんのはりくらりと交わして教えてはくれなかった。しまいには「うるせー」って言って叩かれる。暴力反対だ。

ともかく、魔法で王都には行けないらしい。

地道に歩くしかないってことだ。

エルゼさんと出会った村から、大街道を歩くこと約二時間。はじめて、わたしたち以外で、街道を歩くにんげんに遭遇した。

不自然なくらいひとけのない街道にはとうぜん理由があつて、このあたりの地域一帯には王様から避難勧告が出ているらしい。残っているのはわたしやアキちゃんみたいに極端な辺境に住んでいる者や、エルゼさんのように棲家を離れない者だけと言って考えていいらしい。

こちらに向かって歩いてくるのは、わたしと同じくらいの年頃の少年だった。黒い髪に明るいとび色の瞳。薄手の藍色のフード付きのマントを羽織っていて、その下の服装はいたって簡素だ。

ぱっと見、どこにでもいるような少年だったけれど、その分、背

中に背負う巨大な棍棒が余計に異様なものに見えた。

彼は、わたしたち一行に気づくと、にぱつと八重歯を見せて笑った。そして、ぶんぶんつと大きく両腕を振る。

「せんぱーい！迎えにきましたよー」

先輩？

首をかしげていると、隣を歩いていたカナンさんが少年に応えるように軽く手を上げる。

「やあ、ノルド。ご苦労様」

どうやら、カナンさんの後輩？らしい。少年はぱたぱたと駆け足でカナンさんの前にやってくると、びしつと腕を胸にあてて敬礼してからこう言った。

「ご苦労様、じゃないっすよ。急に連絡が途絶えて、みんな心配してたんですよ」

それから、彼はわたしやアキちゃん、ひとの姿をとっているエルゼさんを見回して、ひとなつっこそう笑顔を浮かべた。

「わあ。このひとたちが今回、先輩の手を煩わせた愚図でのろまで危機管理のなっていない役立たずさんですか？」

うわー。

かわい顔して強烈なことを！一瞬、耳がおかしくなったのかと思っ

どう反応していいのか分からず固まっていると、すかさずアキちゃん

「いてっ」

「殴るぞ」

「いや、アキちゃん、殴ってから言っても遅いよー！」

初対面で本音をぶちまける彼もどうかと思うけれど、手を出すアキちゃんも同レベルだ。案の定、少年はご立腹の様子でアキちゃんを睨んだ。

「なにすんだよー！」

「教育的指導」

少年とアキちゃんが真正面から対立する。ふたりとも背が低いので、ふたりの間に割ってはいえるカナンさんがすぐお兄さんみたいにみえた。

「今のは喧嘩を売ったノルドが悪いよ。彼らは民間人なのだから、もつと優しく親切にしないと。騎士っていうのはね、ただ力が強いだけでは務まらないものなんだよ。わかってるよね？」

「すみません……」

カナンさんに優しく諭されて、ノルド君はしゅんっとした。なんだが、動物的っていうか、彼にしつぽがあつたら力なくうなだれている姿が目に見えるようで……って。

「ねえねえアキちゃん。あの男の子しつぽがあるように見えるんだけど、わたしの目おかしくなっちゃったよ！」

「おかしいのはおまえの目じゃない。あいつの尻だ」

アキちゃんにも見えているらしい。動揺するわたしに向かって、カナンさんは苦笑気味に言った。

「リンちゃん目の目も、ノルドのお尻もおかしくないよ。ノルドはね、獣人族なんだ。しつぽだけじゃなくてふさふさした耳もあるよ」

「そうなんですか！」

「な、なんだよ……獣人なんか珍しくもないだろ」

フードの両端をひっぱって、ノルド君はあとじさった。

獣人って珍しくないんだ。都会のほうではいろんなヒト族がおなじところに住んでいるのかな。

じつと見てみると、ノルド君はカナンさんの背に隠れてしまった。

「彼女たちは辺境に住んでいたそうだから、獣人族をみるのははじめてなのだと思うよ」

「ふーん。ともかく！先輩、いちど花の街で本部に連絡を取ってくださいね」

「うん。用事もあるしね。わかったよ」

鷹揚にうなづくカナンさん。きつと、頼れるいい先輩なんだろうな。

ところで、花の街ってどこにあるんだろう。近いのかな？エルゼさんに聞いてみた。

「そうね、ここからすぐ近くにあるわ。険しい山に挟まれた盆地の街で、北と南の交易の中心になっていたの。とても繁栄しているし、第二の都といっても差し支えないと思う」

「加えて、今現在は黒い影との戦いの最前線だね。影は国の北側で多く発生していて、少しずつ南下していつてみたいなんだ。なんとか食い止めたいけれど、なかなかね」

と、カナンさんが付け加えて説明してくれた。

どうして黒い影が現れるのか、とか、なにが原因で、とか、そういった具体的なことはなにも分かっていないし、どうやれば完全に消滅するのも分かっていない。

ただ、白銀の剣で切り裂けば一時的に追い払うことができるらしい。

「花の街ってところも避難の対象なんですか？」

「いちおうね。けれど、多くの兵士が街に逗留しているから、しぜんと商人や関係者が集まっっていて、以前よりもさらに活気がある街になってるねえ」

カナンさんの話を聞いて、大きな街なんだなーってぼんやりとは感じていたけれど、実際、本物の花の街を目の当たりにしたときには驚きで一瞬声がでなかった。

まず、大きな山がふたつ見えてきて、その間に巨大な白い壁が作られていた。街の門のようで、人ふたりぶんくらいの高さはある鉄の扉が中央にでんとあっただけけれど、その扉はきつく閉じられていた。

これ、開くのかなあ。

わたしが不安になっていると、カナンさんはおもむろに懷から鍵を取り出し、あっさりと扉をあけた。

もちろん巨大な鉄の扉ではなくって、少し離れたところに小さな鉄の扉があったのだ。白い壁に溶け込むように、隠すように作られ

た扉だった。

その扉をくぐると、赤白黄色青緑、あざやかな色彩の波が目飛び込んできた。

まぜこぜになったたくさんのひとの声が押し寄せてくる。がやがや、がやがやと活気に満ちたひとびとの声。

巨大な門の奥には石造りの大通りがあつて、ずっとまっすぐに商店街が続いているようだった。

くだものやさかな、変な雑貨屋から、ちょっと危ない武器屋までいろんなお店が並んでいて、その前をいろんなひとが行き来している。

こんなにたくさんのひと、見たの初めてだ。

「すごい。すごいね、アキちゃん。ひとがいるよ。いっぱいだよ！」

我ながら大興奮して、アキちゃんの服の裾を引っ張る。アキちゃんも、ひとの多さに少し圧倒されているようだった。田舎から出てきたふたりだ。仕方あるまい。

「街なんだから、ひとがいるのが当たり前だろ」

あきれた様子でノルド君がつつかかってくる。もちろん、アキちゃんにだ。

「うるせー。俺はびびってもいねーし、興奮もしてねー」

「は？なに言ってるの？誰もそんなこと言っていないでしょ。ふーん。おまえ、興奮してびびってんだ。ふーん」

すかさずアキちゃんの手が出て、けど、ノルド君はそれをひよいっと避ける。

「へ。ぼくだって騎士のはしくれた。民間人相手に遅れをとるかって……！！」

場所が悪かったんだ、と、ノルド君の名誉のために言っておこうと思う。

アキちゃんの鉄拳をうまく避けたノルド君だったが、運悪く足元に木箱があったために、盛大にこけてしまった。痛そうだ。

石畳に倒れふすノルド君を見下ろして、アキちゃんの一言。

「あんだ、ばかだろ」

「い、いまのは油断しただけだ！」

がばつと顔をあげて、アキちゃんを睨むノルド君。
打ち付けた鼻先が赤くなつて痛々しい。

「はいはい。坊主ふたりが仲良くなつたみたいでお兄さんは嬉しいよ」

「仲良くなんなつてねーよ！」

「仲良くなんなつてません！」

カナンさんのからかいに対して、お約束のようにふたりの息はぴつたりだ。

これにはエルゼさんも苦笑いを浮かべている。

「僕は本部に連絡をしてくるから、その間、こどもたちとエルゼさんのことは頼んだよ、ノルド。宿はひばり亭にとつておいておくから、疲れたらそこで休むようにね」

と、カナンさんは言つて、ひとごみの中へ消えていった。

ノルド君は「はい！」つていい返事をして、笑顔でカナンさんを見送つたけれど。その背中が見えなくなった途端、あからさまにめんどくさそうな顔をしてわたしたちを見回した。

「それで。おまえら、どこか行きたい所とかあるの？」

「いきなり不親切なやつだな。この街になにがあるかも分かつてねーんだぞ、俺たちは。答えられるか」

「めんどくさいなあ。ま、いいけど。てきとーに連れまわせば時間もつぶれるかな」

口ではそういいながらも、ノルド君はあんがい親切に街の中を案内してくれた。

わたしたちが最初に立ち尽くしていた大きな扉があるところが北門で、ながーい通りを挟んで向かい合わせにあるのが南門。この街の入り口は北と南にある大きな門だけで、必ずそのどちらかをくぐらなければ出入りができない造りになっている。

そして街の門から伸びる大きな通り沿いには大きな商店街があつ

て、ここにすれば大抵のものは揃うらしい。その通りを中心にして、西側は一般的な住宅街で、公共施設や短期滞在者のための宿屋など、生活に則した施設がたくさんある。そして東側は個人住宅や王国の兵士たちの駐在所に加えて、ちよつといかがわしいお店が立ち並んでいるらしい。

「もともと商業で発展した街だし、なんだかんだで娯楽施設はひととおり揃ってるな。真昼間なんかは、黒い影の影響なんてなんにも感じさせないくらいだ」

大通りの隅っこで、ノルド君はりんごをかじりながらそう教えてくれた。

「影って、夜しかでないんだ」

「は？あたりまえだろ。そんなことも知らないの？おまえらって、ほんつとド田舎から来たんだな」

ちよつと疑問を口にする、ノルド君はすぐに田舎者扱いしてくる。そりゃ、否定はできないけど何度も言われるとちよつと落ち込む。

「ある意味、しあわせなことではないかしら。十数年、彼女たちは影に怯えずにすんだのだから」

エルゼさんのあたたかいフォローが身にしみる。

「そんなの、単に運がよかっただけだろ。カナンさんが保護しなかったら、遅かれ早かれおたぶつだったろうな」

さすがカナンさんだ！などと、心酔した様子でノルド君は語っている。

初対面のときから、なんとなく感じていたけれど、ノルド君って本当にカナンさんのことが好きなんだな。好き、というか、尊敬、なのかもしれないけれど。街の案内の合間合間にカナンさんがどれだけすごいかわかるのを挟んでくるので、正直、カナンさん豆知識についてはおなかいっぱいの状態だ。

そんなノルド君の話を、うんうんって聞いてあげられるエルゼさんの懐の広さに感動する。

「ねえ、アキちゃん。おなかすいたかも」

「そろそろ、そう言うと思った」

お昼の時間はとくに回っていて、街の中は目新しいことだらけで、案内してもらっているときは空腹も感じなかったけれど。

急速におなかの虫がだだをこねはじめた。だって、成長期だし。

「ノルド君、ノルド君」

「それで、カナンさんは俺に言ったんだ。騎士としてではなく、ひとりの人間として君」

「ノルド君！！」

「ん？」

カナンさん語りに熱の入るノルド君の肩を思いつき揺らして、主張する。やっと気づいてくれた彼は、話を邪魔されたからかちょっと不機嫌そうだ。

だが、知ったこっちゃない。こっちは腹ペコでもっと機嫌がよろしくないのだ。

「おいしいごはんが食べられるお店につれてって」

「具体的に食べたいものとかないのか？」

「食べられるならなんでもいいよ。ひもじいよ」

寛大すぎるわたしの主張に、ノルド君もアキちゃんも、エルゼさんまで笑っている。

こっちはいたって真剣だというのに、ちょっと酷いと思う。

花の街・恋の街2

ノルド君が連れていってくれたのは、大通りから東に少し入った場所にあるレンガ造りの小さなレストランだった。

時間的にお昼のピークをすぎているはずだが、それなりの人数のお客さんでにぎわっていた。客層も幅広く、おとなから子どもまで、獣人族から精霊族まで感じて。

ノルド君をはじめて見たときは、ちょっとびっくりしたけれど、こうやって他のヒト族を見るとノルド君はわたしたちに近いヒト族なんだなということがよく分かる。

なにせ、頭が魚のヒトや腰から下が馬のヒト、半分透けてるヒト、なんでもありだ。

つついじつと見てみると、アキちゃんに注意された。いけないいけない。あんまりぶしつけに見るのは失礼なことだね、やつぱり。

給仕係りのひとに案内された席は窓際の四人掛けのテーブル席で、わたしとアキちゃん、エルゼさんとノルド君が隣り合う形で腰掛けた。

ちよつと日当たりが悪いのは気になるけど、レストランの中はおいしそうないい匂いに満ちていた。

「どれにしようっかな」

さつそくメニューを開いて、どの料理がいいか選び始める。

「ノルド君、おすすめってあるの？」

「オムライスが美味い」

「おお！じゃあそれにしようかなー。アキちゃんはどうする？」

「んー」

気のない返事をしてメニューをアキちゃんは覗き込む。そのときだった。

アキちゃんの頭が、テーブルにめりこんだ。

うわー。痛そう。

じゃなくて、大柄なおとこのひとがアキちゃんの身体を背中つぶしていた。

おとこのひとと誰かに突き飛ばされたような感じで、痛そうに頭を抑えている。

「なにしゃがる、てめえ！」

おとこのひとは勢いよく体勢を整えると、乱暴な言葉遣いで吼えた。

対峙するのは柄の悪そうな赤髪のおとこのひとで、なんとなく、まさにチンピラ同士の因縁のつけあいって感じだ。近寄りたくない。関わりたくない。

「それはこっちの台詞だ、ばかやろう！あの女は俺が先に目をつけてたんだ！」

「後も先もあるかよ！んなもん早いもん勝ちに決まってるだろうが！」

そんなことを叫びながら、おとこのひとはとつくみあいの喧嘩を始めた。

わたしたちのテーブルの近くでやるものだから、埃はあがるわ危ないわでとてもじゃないけど座ってられない。

でも、それ以上に、わたしのすぐ隣で不穏な空気が立ちのぼっていた。

「ひと様にぶつかっておいて、謝罪のひとつもないのか。てめーら額をしこたま打ち付けたアキちゃんは、平素から凶悪な目つきをより一層つりあげて、喧嘩をするおとこのひとたちに詰め寄った。」

「あ？」

「ああん？」

思わぬ闖入者に、おとこのひとたちは顔をそろえてアキちゃんを睨みつける。

「アキちゃん、だめだよ。そのひとたちは関わっちゃいけない人種のひとたちだよ！」

「リンちゃんも意外というのね……」

エルゼさんの冷静な分析はおいておいて、完全に頭に血が上ったチンピラたちを遠巻きにレストランのお客さんたちが見守っている。とても迷惑そうに。

アキちゃんって怖いもの知らずだなあ。なんてのんきに現実逃避をしている場合ではない。とにかく、止めないと。

「ノルド君！騎士なんでしょ。なんとかしてよー」

「やだよ。めんどくさい」

面倒だとか面倒じゃないとかの問題じゃないと思う。けど、ノルド君は完全に知らん振りを決め込んでいた。

こうなったらわたしは……！とも思うが、あのチンピラ三人の中に入っていく勇氣はない。右往左往している間に、三人はにらみ合いながらレストランの外に出て行った。まさに、表に出る！コルア！な展開なんだろう。

おなかですいたのも忘れて、わたしはあわてて三人のあとを追って店の外にでた。

どうか、アキちゃんののされていませんように！

切実に願いながら、表に出ると、アキちゃんがひとりで道に立っていた。

「あれ？」

ほかのふたりのおとこのひとはどうしたんだろう？

そう思っただけをよよく見てみると、アキちゃんの足元でおとこのひとがふたりともうつ伏せになって倒れていた。完全に気を失っているようだ。

「へえ。やるじゃん」

のんびりと店の外に出てきたノルド君が、ひゅうつと口笛を吹いた。

アキちゃんは、どう見ても肉体派ではない。ひがな一日森の中で黙想したり、おじさんの書齋で本を読んだりして過ごしてきた超インドア派のはずだ。体格のいいおとなの男性ふたりを力でねじふせ

ることができるようにはとも見えない。

「魔法？」

「そらそーだ。俺は魔術師だからな」

ただの喧嘩に、そんなの使っていいのかなあ。魔法は繊細なんだって言うてたのに。

そしてアキちゃんはなにごとでもなかったかのように、レストランの中に帰ろうとする。が、それは叶わなかった。わたしたちと同年代くらいの少女が扉の前に立っていたからだ。

肩まで伸びた癖っ毛の金の髪、エメラルド色の猫のような大きな目。薄い水色のワンピースからすんなり伸びる手足。健康的な色気のあるかわいい女の子だった。

彼女はゆっくりとアキちゃんに歩み寄り、ごく間近で微笑みかけた。

「君、強いんだね。かつこいいな」

対するアキちゃんは、眉をひそめてうさんくさそうな目で彼女を見返す。

「あ？」

「あたし、リュネ。さっき、君が吹っ飛ばしてくれた男たちにしつこく言い寄られていて困ってたんだ。助かつちゃった。ありがとう」
うーん。声もかわいい。さりげなくアキちゃんの肩に触れて、首を傾げるしぐさもおんなのこらしい愛らしさにあふれている。

「なにかお礼がしたいんだけど、時間あいてる？」

「この辺で装身具を売ってるいい店知ってたから教えて欲しい」

「あは、もちろん。案内してあげる。こっちょ」

も、もしか……。

これはいわゆる逆ナンというやつではないだろうか。

リュネちゃんはアキちゃんの右腕に腕を絡めて、歩き出そうとするが、アキちゃんは動かなかった。

呆然となりゆきを見守るわたしを手招きして、ぐいっとリュネちゃんをわたしに押し付ける。リュネちゃんもいきなりのにびつ

くりしているようだ。

「エルゼさんの棲家を探すって言ってただろ。案内してもらえよ。待ち合わせはこのレストランの前な。夕方には合流しよう」

そして、アキちゃんのリユネちゃんから興味をなくしたようにそっぽを向いて、ノルド君に話しかけた。

「ノルド、この辺で魔術関係の施設ってあるのか？」

「そりゃね。あるよ」

「案内しろよ」

「おまえっていちいち偉そうだよなあ。なんかムカつく」

悪態をつくノルド君の背中を蹴飛ばして、アキちゃんは軽く手を振った。

「じゃ、そういうことで」

あれよあれよという間に、アキちゃんとノルド君と別行動になってしまった。

残されたわたしとエルゼさんは、おそろおそろ振り向いて、リユネちゃんの様子を伺う。

「……」

お、怒ってるかなあ。怒ってるよねえ。

アキちゃんの態度はまったくもって褒められたものではなかった。おんなのこに対してずいぶん失礼だ。

どうフォローするべきか考えあぐねていると、リユネちゃんは両頬を上気させ、両手を胸の前で合わせてそっとつぶやいた。

「超クール！ かつこいー……」

世の中にはいろんな趣味のひとがいるらしい。

あれってクールっていうのかな。単に失礼なだけだと思うんだけど。

「さつてと、将を射んとするならまずは……てことで。えーつと、さっきの男の子のお連れさんだよ。君。連れて行ってあげるから、どんな装身具が欲しいか教えてよ」

ハキハキと喋るリユネちゃんに連れられて、わたしとエルゼさん

はレストランから少し離れた場所にあるという街の北側にある宝飾屋さんに向かうことになった。

その道すがら、リユネちゃんはたくさん質問をした。そのどれもが、アキちゃんにまつわることで、名前や年齢から始まり、出身地や趣味などなどだ。

本人に聞いてくれたほうが早いと思うんだけど、いないから仕方ないか。

「ところで。君たち、彼とはどんな関係なの？」

彼、とはもちろんアキちゃんのことだろう。

エルゼさんはふんわりと笑いながら答えた。

「私はつい最近知り合ったばかりなの。強いて言うなら、恩人、かな？あ。もちろん、リンちゃんもよ。よい友人になれると思っているわ」

エルゼさんの答えに、リユネちゃんは満足したようだった。

そして当然、その質問はわたしにも向けられているわけで。答えないわけにはいくまい。

「えーっと……わたしは、アキちゃんの幼馴染かなあ。家が近かったから、よく一緒にいた気がする」

「ふーん」

まるで探るように、エメラルド色の猫目がわたしを見つめる。

なんだろう。ちょっと睨まれているような気がする。けど、すぐにリユネちゃんはにっこりと笑顔を浮かべて言った。

「いいな。あたしもアキのこどものころとか見たかったな。かわいかったんだろうね」

「えー。そうかなあ」

「そうだよ。ね。小さいころ、アキってどんなこだったの？」

リユネちゃんに聞かれて、わたしは考えてみる。

アキちゃんって、こどものときどんな風だったかな？

アキちゃんのことを考えると、まず、浮かんでくるのは強烈な親近感。その理由を探すけれど、なんとなくぼんやりとしていて、う

まく思い出せない。

昔のことだし、すごく記憶があいまいだった。

でも、聞かれてるんだし、答えないと。考えて考えて、結局、わたしはこう言った。

「ちいさかったよ」

「誰だって小さいでしょ。もつとほかに、思い出とかね」

思い出といわれても、すぐには出てこない。

誰かに聞かせられるような面白いエピソードがあればよかったのだけれど、あいにく、あの静かなさいはての森の奥では、穏やかで淡々とした日々が営まれてきたのだ。

あの場所は平和だった。きっと、退屈で、なんでもない日々こそが平和だった。

「君って、優しい顔の割りに意地悪なんだね。思い出くらい教えてくれたっていいでしょ」

気がつけば、リユネちゃんがぶくーっと顔をふくらませて睨んでいた。

ちよつとぼんやりしていたらしい。わたしはあわてて両手を振って否定する。

「あ、えと。本当に、きちんと思い出せなくて。わたし、昔から頭の回転がにぶいから！もうちよつとすれば思い出すとおもう！」

「いいよ。もう。それより、店についたよ」

リユネちゃんが案内してくれたのは、比較的大きなお店だった。宝飾屋っぽく、いろんな色の飾り玉やガラス細工が店頭に並んでいる。

店の中に入ると、温厚そうな老紳士が出迎えてくれた。軽く会釈をして、店の中を見回してみる。

お店の中には、髪飾りや首飾りといった装身具だけではなく、手鏡や櫛といった日用品もおかれていた。それらには綺麗な石がはめ込まれていて、見ていて飽きることはない。

「わあ。どれもすてきだねえ」

「そうね。きらきらしてて、目移りするわ」

エルゼさんも、ものめずらしげに店内をぶらついている。リユネちゃんを交えて、あれがいい、これもいいなど言って軽い品評会だ。

ひととおり店内を見て回って、なにか気に入ったものがあつたかどうかエルゼさんに尋ねてみる。

「エルゼさんの棲家なんだし、エルゼさんの気に入るものがないよ」

「そうねえ……」

すると、店の店主らしい老紳士がわたしたちに声をかけてきた。

「おや。もしや、精霊族の方の宿り石をお探しですか？」

宿り石ってなんだろう？

首を傾げるわたしに代わって、エルゼさんがうなづいた。

「ええ。新しい棲家を探しているのです」

「ほうほう。して、どなたの？」

「私です」

老紳士は鷹揚に頷きを返しかけてから、少し仰天した風に肩を揺らした。

「あなたの？……これは失礼しました。てつきり、あなたは人間族の方だとばかり」

たしかに、エルゼさんはまったくの人間に見える。

そもそも、精霊族と他のヒト族の違いなんてわたしは知らないのだけれど。

たしか、精霊族は鉱石を棲家にしていて、ヒト族の中でも長命だとカナンさんは言っていた。でも、エルゼさんを見る限り他に身体的特徴があるわけでもなさそうだし、精霊族だといわれなければ、見分けはつかないだろう。

けど、その考えはリユネちゃんの言葉で覆される。

「へえ。君、精霊族だったんだ。綺麗に実体化しているね。相当、力、強いんだ」

「じつたいか??」

話についていけないわたしに、エルゼさんが優しく解説してくれた。

「精霊族というのは、普段はあなたたちにみえないところにいるのでも、ほかのヒト族とも仲良くしたいから、あなたたちに似た形をとってるの。この街にも、半透明の存在があつたでしょう。あれが精霊族かな」

そう言うエルゼさんを見つめながら、老紳士は感嘆のため息をついた。

「私も長く生きてきましたが、いやはや。あなたの力に耐えうる鉱石は滅多にないでしょうな。この店に出している品では難しいと思いますよ」

「……そうですね。残念です」
ど、どうということだろう？

ぽかーんと話の成り行きを見守るわたしの頭をそつと撫でて、エルゼさんは言った。

「精霊族の棲家は、どんな石でもいいわけではないの。せつかくつれてきてくれたのにごめんなさいね」

「そうなんだ。うーん。でも、楽しかったからいつか」

「うん。私も、そう思う」

当初の目的だったエルゼさんの新しい棲家探しは振り出しに戻った。

けど、無理に探す必要は本当はないんだよね。エルゼさんさえよければ、あのままアキちゃん的首飾りに住んでもらうのがいいとわたしは思っている。だって、それなら、エルゼさんずっと一緒にいれるもんね。

このとき、わたしはものすごく楽観的だったと思う。

だって、アキちゃんと離れることは絶対にないんだって、当たり前のように思っていたのだから。

少年達

ノルドに案内されて、アキサリスがたどり着いたのは石造りの巨大な建物だった。

同じような形をした角ばった建物が、規則正しい間隔で三棟並んでいる。丸い噴水を囲む形で向かいあうように建てられた建物の傍には、それぞれ異なる色の旗が掲げられており、東には剣、正面は星、西には錫杖の意匠が刻まれていた。

みつつの建物のうち、正面を指差してノルドは言った。

「魔術なら、星の描かれてる旗がある建物だな」

アキサリスは東、正面、西の順で視線をはしらせ、問うた。

「東と西にあるのは？」

「東は騎士、西は神官たちの拠点だ。剣は力を、錫杖は信仰を、星は知識を表現してるんだとさ」

「へえ」

聞けば、案外ノルドは親切に答えてくれる。根は悪い人間ではないのだろう。

そう思いながら、ふと、アキサリスはノルドの背中に視線をやった。騎士の象徴は力であり、力の象徴は剣である。けれど、目の前の少年が負うものは、鋭い刃ではなく、重く打ち付ける棍だ。そのことにいささかの疑問が浮かぶ。

「あんたって、騎士だよな。剣は持たねーの？」

「僕は、神殿の騎士だからな。剣は持てないんだ。……てか、そんなことどうでもいいだろ」

「それもそうか」

「おい。そこは普通、気にする場面だろ！」

「じゃあ聞くけど？」

「ぜーったい話してやんない」

気にして欲しいのか、気にして欲しくないのか。ノルドは口をく
の字に曲げて、アキサリスから顔をそむける。

しかし、アキサリスはさして気にかける様子もなく、まっすぐに
星が掲げられた正面の建物へと向かった。そのうしろを嫌そうにノ
ルドがついていく。

尊敬する先輩騎士のいいつけをやぶって、アキサリスをひとりに
するつもりはないらしい。口は悪いくせに、変なところで律儀だ。

拠点の門前には、鎧を着た門番がふたりいて、入館者ひとりひと
りに注意を払っている。門番たちに軽く会釈をして、アキサリスは
建物に入った。ノルドもあとに続く。

だんまりでついてくる分には、ノルドはアキサリスの邪魔になら
なかった。

むしろ、神殿の騎士という彼の身分はたしかで、この街にとって
得体の知れない旅行者であるアキサリスよりもよほど自由が利いた。
アキサリスひとりであれば、この魔術師たちの拠点だという建物に
入れたかどうか、それすらあやしい。

受付らしきカウンターには赤い帽子をかぶった男が暇そうに座っ
ていた。

男はアキサリスとノルドの姿を一瞥して、すぐに興味を失ったよ
うに手元の本に視線を落とす。

「黒い影に関する資料が読みたいのですが、ありますか？」
アキサリスは、カウンターの男にそう告げた。

彼の目的は、黒い影に関する情報を集めることだった。カナンや
エルゼによる伝聞の情報は、間違っているとは思わないが、不確か
だ。もっと大きく、広い形で、この地のひとびとに共有されている
情報を得たかった。

男は顔も上げずに、ぶっきらぼうに答えた。

「ある。ありすぎるくらいだ」

「では、撃退方法が記載されているものは？」

「ある。ただ、素人には扱えないし、効果も影をひるませる程度の

「こどもだましなものばかりだな」

「それでけっこうです。どこに行けば拝読できますか？」

男は顔をあげて、アキサリスを観察するように視線を動かした。

「おまえはこの街の人間じゃないな」

「定住している人間にしか読めない資料なんですか？」

「俺に聞くより、おまえのうしろにいる坊主に案内してもらったほうが早いと思うぞ。一応、持ち出しはできない。それだけ覚えておいてくれ」

男に教えられた資料室には、誰もいなかった。古い紙のにおいが満ちた小部屋で、ところ狭しと並べられた木製の本棚にはみっしりと本が詰まっている。

棚の上にも無造作に本がおかれており、はたして正確な分類がされているかはなはだ怪しい。この中から目当ての資料を探すのは骨が折れそうだった。

「おまえ、黒い影のなにが知りたいわけ？」

この部屋にある唯一の机の上に行儀悪く腰掛けて、ノルドは本棚をあさるアキサリスに問いかけた。

「できるだけ多くのことを。成り立ちが分からなければ対策を講じることまでかねー」

「成り立ちったって……なあ。気がつけば影はあつたし、昔からずっとあるもんだし。爆発的に数が増えて、被害が大きくなってきたのはここ数年だけだよ」

ぱらぱらと分厚い本をめくりながら、アキサリスは雑談を続ける。「どうして急に増えたのか、そもそも影とはなんなのか。昔からいるなら、そのへん研究してるやつだっているだろ。しらねー？」

「いちばん有名な説は、悪魔。人間に下される天罰。街の界限では黒い影にまつわる変な宗教も出てくるし、すごい迷惑してる。あとは……病原菌説やら死人説やら」

黒い影に相対したとき、アキサリスはいいような不安にかられたことを思い出した。この世のものではあつてはならない、世界

の異物。

あの影はきつとそのようなものだ。

「悪魔や病原菌つーのは、分かるけど、死人ってなんだよ。根拠は」
「僕も詳しくは知らないけど、黒い影の声を聞いたって報告が何件かあるらしい。で、その声が死んだばあちゃんだったり、じいちゃんだったりに聞こえたってさ。単なる聞き間違い、空耳だろうけど。笑えるだろ」

ノルドはそう言って笑ったが、アキサリスはちっとも笑えなかった。

夜になれば、また黒い影がでてくるはずだ。できるだけ早く、対策を講じなければ。その一心でアキサリスは本のページをめくった。成り立ちさえ分かれば、アキサリスは黒い影に対抗する力を得ることが出来るだろう。なにをなすために、彼らは存在するのか。あるいは、なにをもつて、彼らは存在するのか。

アキサリスには自信があった。彼の父は偉大な魔術師であり、彼もまたそんな父を師と仰ぐ魔術師だ。

彼の父は、魔術とは世界を紐解くことだと彼に教えた。

世界を分解し、融合させ、思うとおりの力の形にするのだ。

一般的に魔術を行使するためには一定の定められた手順と呪文が必要だと解されているが、これは必要条件ではない。

どのような物に対して、どのような効果を与えたいか。強くイメージできれば、それはそのまま力として発現する。一方、一瞬でも意識がずれば容易く崩壊してしまう。

手順や呪文は、発現する力に対して、それらが必要だと認識していれば、無意識下で、その意識がずれることを防いでくれる役割をもっていた。いわば安全装置のようなものだ。

その安全装置をもたないアキサリスは、ある程度自由な力をもつ反面、もろいともいえた。

「おい。もうそろそろ日が落ちるぞ」

世界を紐解くには、知識が必要だ。黒い影に関するあらゆる情報

をアキサリスは必要としていた。

「……分かった。戻るか」

けれど、時間は限られている。夕方には合流すると、彼は幼馴染と約束していたのだから。

アキサリスは名残惜しげに書物を本棚にしまつて、暇そうに足をぶらつかせるノルドのもとに寄つた。ノルドは机から飛び降りて、くんつと両腕をあげて伸びをする。

「ぼくってやさしいよなあ。ちゃんとこうやっておまえに付き合ってるんだから」

「少しは手伝えよ」

「色々話してやっただろー。影のこととかさあ」

資料室を出て、ふたり並んで白い大理石づくりの廊下を歩く。

受付のカウンターに座る赤い帽子をかぶつた男は相変わらず本を読んで、少年二人が出て行くのを気に留めるそぶりはない。

二人も男に対して軽い会釈をするだけで、とくに声はかけなかった。

知識を求める人間には変わった人間が多い。大体がひと嫌いだ。色々なことを知りすぎて、きつと人間に嫌気がさしてしまつたんだろう。カウンターに座る男もその類の人間に見えた。

そのまま星の旗を掲げる建物を出て、三方に建てられた建物につながる三又の道が合流する、丸い噴水の前をふたりが通りかかったとき、前方から歩いてくる男たちの姿が見えた。

彼らはみな一様に帯剣しており、そろいの青い肩掛けをしている。白い詰襟に白い下衣を着た人間族の若者たちだった。

アキサリスは特に気にもとめずすれ違おうとしたが、ひやかすような笑い声と、侮蔑に満ちた言葉が聞こえ、思わず立ち止まった。

『実力もないくせに思い上がった』

『親の七光り』

『権力を盾にする恥知らず』

一瞬、アキサリスは自分のことかと耳を疑った。

たしかに思い上がっているところはあるかもしれないが、見知らぬ人間にバカにされる覚えはない。

いぶかしんでいると、うしろから背中を押された。ノルドだ。

「なに立ち止まってんだよ。さっさと行けよ」

「……ああ」

背中の方こうで、若者たちのふざけたような笑い声があがる。

アキサリスは遠くなっていく彼らの悪意を聞きながら、さきほどの出来事の矛先が誰に向けられていたのかを確かめた。

「あんたってさ」

「なに」

「いじめられてんの？」

アキサリスの問いかけに、ノルドは尻尾をぴーんと逆立て、地団太を踏んで反論した。

「違う！ ひがまれてんの！ ぼくってさー、ほら、若いのにいちおう騎士だしー。親もちょー権力者だしー、顔もいいしー。恵まれすぎてどうしよーって感じで？」

「ほお。初耳だな。それで言い訳をしたいのかもしれないが、原因は性格じゃね？」

「うるさい！ とにかく、なんて言われようとぼくは騎士なの！ あんな下積みのやつらにバカにされたってぜんぜん悔しくない！」

どうみても悔しそうだ。

聞いてもいないことまでぺらぺらと話す少年は、白い肌を真っ赤に染めてうなっている。

話を聞く限り、いいとこの生まれらしい彼が、固執する騎士という肩書きに少しだけアキサリスは興味を持った。

黒い影の発生する北の地で、たったひとりでカナンは行動していた。もしも騎士というものが単なる名誉職であれば、そのような危険な仕事があてがわれることはないだろう。

それとも、カナンは単なる例外なのだろうか。

「騎士ってそんなにいいのか？」

「当たり前だろ！カナンさんと一緒なんだ。いいに決まってる。まあ、カナンさんは王様の騎士で、ぼくは神殿の騎士だけどさ。騎士は騎士だ。細かいことは関係ない」

騎士の中でも違いはあるようだが、ノルドの返答はいまいち的を射ない。

分かったのは、彼は相当「騎士」というものに入れ込んでいるらしいということだ。そして、おそらく彼は「騎士」の称号を得てなお、満足はしていないようだった。あの悪意に満ちた若者達の言を考慮するならば、その理由はおのずと見えてくる。

「ひとつだけ言うておく」

ともかく、これだけは伝えておかねばなるまい。

ノルドの姿を見て、アキサリスは強くそう思った。

「あんた見てると、この国は騎士って称号のバーゲンセールでもやってんのかとこどもが勘違いするぜ」

少年達が、とっくみあいの喧嘩を始めるのはいたしかたないことであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153o/>

夜明けの魔術師

2011年12月18日21時52分発行